盤膓画底稿　一

特別
へ 12
1077
54

手習　墨付百九十一枚

薫廿五歳　大将　花鳥には此巻の年紀を

今年九十四也此巻にて此事見えたり

妹乃ぬし無そうけ給ふ乃巻を

同年の事なるへしとそ

私薫廿六七歳の事なるへき歟

前の巻もうけふの後を同時也

浮舟のうせたる翌朝の事と

きこえたるかさてうき舟の事は

早稲田大學圖書

利
1077
5354

手習

廿五歳　大将　薫は廿三の年の春
より廿四の春まての事見えたり
浮舟の姫君としハいふ蜻蛉の巻
と同年の事なるへしとそ
私薫大六七歳の年しるされ
此巻もかの姫君と同時也
浮舟のよせかは聖那の事と
さしてよみてかへすを比ゆへのせい

廿六才此三月の末より秋まて
此事なり此巻ハ廿六才同時の
事より廿七才此春まての事なり
ときこゆ

横川僧都母尼并妹長谷詣帰路
宿宇治院事

宇治院樹下にて変化物あり
是浮舟之事也 妹尼養性事
此女則浮舟君也

宇治院守人来僧都ニ宇治院所縁
子細ニ此頃葬送の雑事とて従ふ
まいりけるとて昨日まてまいり
侍らさりしとおほゆ 然則 此巻ニ蜻
蛉巻同時事也 並まわりハ横並と
云へし 但蜻蛉巻ハ一向に京あり
宇治此事なとかきあり まのあたりにハ小
野尼此見つけて小野へ帰る
とかくり饒舌多くなりてさるた

より二巻と同時乃事ともあり
設車二両載伴女君渡小野事
四五月間其女悩給ふ
僧都妹尼母其舞中将訪横川僧都之次来小野事
中将自簾隙見此女事
一宿横川事
又元日中将来小野尼許
中将懸彼女事
八月十余日中将小鷹狩次来小野事
中将吹笛事
尼君求合物音事
九月妹尼君又参長谷事
与女将君打碁事
中将来小野事
中将不逢
横川僧都出京之次来小野母尼許

手習姫君請僧都出家事
中将又来見姫君出家之由事
・立后又遣文事
妹尼君自長谷下向事
横川僧都奉加持一品宮御居之次
中宮承此物語事
・浮舟之流浪変化物中来事
・大将忽入小宰相君在御前聞僧都
物語り

僧都登山之次来小野
中将来小野逢妹尼君事
・中将自ハ下漂（たゝ）見たる尼君歸僧
事

・廿六歳　大将
・私花鳥にハ廿四歳乃春となり
此年立にハ廿六歳とされし也
も実説ハ廿七歳乃春なり年
立にハ一年此返り花鳥にハ

三年ハおほ遊れて
妹尼小野ニ住居事
大尼公之孫紀伊守小野ニ来事
鎮大将殿与姫君中来事
手習君関之絵事
小宰相君以僧都ニ於鎮右大将殿事
大将来山中壹之次歌詠横川ニ

手習

河
浮舟君身をなけし涙乃川ハ
そや呼漸もとあるよりもしをと
いふ羽巻ハ中にはける所れり雖
山の雪とつもりそめとある所にも
まいハすしさきハまうひとを
すひのひまふりし結とともり仍

花
若手習君
袖ふりて巻ハかれとせり　薫大将

九之年ハ春より九月乃春まての
事なりしうちしか此年ハかけ
ろふの巻と同年の事なるへし
巻名以詞并歌之名とゝ云詞に前
にあり薫廿六七歳の事也かけ
私
ろふ此巻の終と同時なり浮舟失心
らせて翌日此事也之此年くれて
次乃年此春まての事也小野
にありてうき身の君とゝゆり義

哥
巻名詞よまてうきあるしらぬ
よし所ゝにあり薫廿六七歳かけ
ろふの巻此終と同時なり浮舟の
うせて後の翌日より此事なり
二之年くれて次の年まて此事也
義
手習の詞に所よ有り二之心有之
未勘ゝゝ

そのころよ川になにかしの僧都とかいひ
ていとたふとき人すまひけり八十(ヤソヂ)あま
りのおやと五十(イソヂ)ばかりのいもうとありけり
竹 比叡山三塔東塔西塔横川
なにかしの僧都とハ恵心僧都なり遁世
乃後隠居横川号横川僧都
母事妹安養尼事在別紙
花 是ハ薫廿三より廿八の事みえたり
といふハ大かたの時代をさして云し横川なるに

かし僧都とハ恵心院の源信僧都よ
ちひさうにてとゝり此僧都ハ慈恵
僧正の弟子にて横川にすまれ
けれは顕密の教をきはめ給へりい
もうとありけり此妹といふは安養
尼といひし人なり母ともいへり世
業をいとひ往生せし人なり
此母は猶よ此尼といひてゑむ
君をと屋しきたまひし人なり

秘

その比よりは先時代をさしつけて
僧都ハ恵心院僧都といひける
元行海より見えたる異義
傳記曰僧都大和國葛
城下郡人父占部正親母
清原氏也母夢天人下授一男
之女見乎覺後四人若丁成孕
人欲思之其後彼母令祈請子
息於觀音長谷寺ニ元処夢中
僧来令与一珠見乎不久懷妊
男子即恵心僧都也已成人之
後有事縁登山出家授戒後
学之業既成論義史擇閲世彼君
公請預種々禄乎為家初得物
之間為令悦令送其物於母元許
母返報云吾不送之物致不悦不願
着偏道母後道之営也云々即随母
命止諸縁隠居于横川若後浄土

元業寛弘元年五月廿四日任權大
僧都同日辭表一期所作善根者
念佛二十俱胝及轉大乘經五万五
千五百巻念阿弥陀大呪百万反尊
勝陀羅尼卅万反千手陀羅尼七
十万反佛眼不動光明真言不遑
注進又所造書籍雖多其中往
生要集三巻一乘要集三巻殊
勝宋朝明聖未見往生要集權
化所作称美讃嘆寛弘二年十
二月十日朝飲如常浄身口
無所痛捕佛御手線念佛數
百反眠絶給年七十六而已
大和物語云何ごとにつけてもあれ
世にすみのえをと山とをこもりし
とうのみねといひけるよりとふね
みこすかりつはゝ上河
南家之氏なりてぞ河せりまして

なりけり

花
僧都の母君なりけり世にまうでくる也
恵心僧都とは云此母乃なり時に
観音に祈請してまうけたる人にて
さはりありてみ乳なくて
まうでくると云なりや

松
源信僧都の母君は観音の利
生まりて僧都を生しける事あり
されはこそ世にまうでけるよせ

あはれし嶺

井
源信僧都の母君は観音乃霊
ありて源信を生す事ありき
うはせ事より多よりあれはこそ
世にまうでけるとうけたまはりし
妹乃事母の事すと彼岸によ
りしてうけきもりいはく此事も
よしとおほせつきとはなくかうれ
もろもろしく侍るとすくにさいでし此

わきり

秘 僧都の中子し母に具しけるし 義

仏経くやうすとて

此中子乃あきらめのしるし

まうでとりて山にしけり

奈良坂大和し

このあり君心ちわしく

義 僧都乃母まゐり

らんとてわにきりまゐりける人

宇治へ此阿闍梨乃是れ在人乃家

なりし

よろこびせきとしらわ

義 僧都へいひつかはしける

山こもりして里にいでじと

義 千日山こもりすや

阿 恵心僧都妹安養尼絶字之時若

心可来會之由僧都契約云々

而僧都千日山籠之間自尼許未

遣云老病歩難罷成了今一度
對面大切々々雖然限日數之山籠
難出洛了然者乗輿可来會
西坂本之由返答畢於下松辺
相待之処輿已到来僧都進
寄褰簾見之処尼上既逝去
相輿到清義房 修学院 清義先
心經七巻讀之次以火界咒加持
之恵心又奉念地蔵則蘇生

云々 古事談

みちはこうけて 義 半途
いさきあしのそり
僧都の下山し
あしむかくもあらねへ乃さ向
義 僧都の母れ年よりけるを
こ川かうもてしの中よりもきん
あるかこそり
義 こ川かうれ僧都し

うちしはく

（行）加持加著佛ノ密也　持者行者ノ

業也ノ密を三業ニ持するを加持

といふ

みたけさうしと侍るをとりとあはる

まうての

（花）金峯山精進より後夜の庭前

礼拜金峯山百度する事ゝゝ

（義）此家あるしみたけ精をするし

此まうつる人死すれは精進おこる

なるや

いとせちなるもろゝしうもおもはれて

（義）此宿のよし

あやしくおそしてまうつると

（井）将てや　かねのおとのしかれ

まうみふさりて

（花）古人云長神也ゝゝ　熱田中神ト

天一神有中央所ありゝゝ　歸本

巻子勘弁し

まいすこめふ所ハ

苑 尼の里小野よあり

類 尼君ハもと小野の事ハ

故朱雀院の御領にして宇治乃院

といひし所

河 平等院建立以前ハ宇治院所

見て引勘

花 李部王記 天暦元年十一月二日

太上皇陽成院御宇治院遊猟山

野又天慶八年十月十八日朱

雀院 宇多帝 宇治牧勘文云宇治

院薗原庄被留後院云々

今案朱雀院ハ寛平法皇とや

やとされたる此あ院乃朱雀院なりき

秘 すせ侍し

寛平院も朱雀院の御領とあれて

別の所なり 但宇多院御

発願られし　さてかやうにうき
みせ給し
新
平等院の事ハ以前ハ六条院の比
つくとしり朱雀院ハ御願也
うけもさやうによみならるゝや
篆
平等院く石書
とりせられしの
秘
院ありハ萬葛とや
虎とりハおもさみ

新
宇治院の萬葛ハくハあまりてし
てあやしさ菊ちうおりなる
うすくし
篆
萬葛ハ菊や
おりしもさけいや
萬葛の菊乃いつて
あまりてのくそつのよそやとり給
流のよさうハく乃宿をとうまし
いとよろすり

僧都の詞

扨やけ所なれと

朱雀院の御領なれはや

ところそうするもうひなくして

宇治院とこしらへて僧都のも

とへむかしの末法し

このころ川せにそひたるあさりと申し

やうらい舟ひとつ

比丘尼君よりひさゝ法師と

此寺とし

同しやうなる法師と二人や

今ひとりハ僧都のとりして

来るとし

おのかなるすゝき

人のうしろゆかすなき

さやうのおしそくつきなんと染く

つとて

下とむすかをとつろうかて

秘 遠くちかき事と読みて
かしらはみえあはふたりはくさき
何 女とハ男の毛見えぬ唐人ハ待よ
髪如行すと読る也
秘 法師なれ共かくハ唐なる男は毛ちら
しるし 俗人の髪あるへかりと
おちしるさ由や
秘 法師なれ共かくまり男は毛た
ちゝる也し 髪

秘 勘物云枕草子下にまし 義有乃
所よいまそ法こし 出させ給たまふ
かそこしと見えてまかなり 頭白
となるくとさしあら此枝に本の
薄はいとなるやうに加く唐さて候
のかさひろ乃多法やかあて候へそ
いとしき御紙をかりて出させ給
御輿のころひろはうらゆきさま
奈りあてまとらのかしら乃け

まとへのいふかひなきことなり

もとこ

河海の説も浅くうをきこえけりしか

あれたとへは狐の女と変化せはなる

そとのり以をと髪よなし文集

ふるきうみえも子すへきに

いふ心よや楽府の古塚狐の詩よ

頭変雲鬟面変粧大尾曳作長

紅裳といへり狐乃女の変

なはさまをといへり変雲鬟の

いふこともまたかしられけるをかへ

ふきりわへき也はすはとゆはな

なるへし

私説按此等の用を河海此

説然へし

あ（から）ふるさきさ浦とそ

奥のさし　思還もなくふとより

はゆきあり

ひとりはまして

阿闍梨二人の内し
きつねの人になりけするとい
（秘）俗説乃説
（い）水鏡云欽明天皇美濃乃国より
ある男かゝへきさきをもとめむとて行
道にしよ野中にて女にあひ
給はきられと嘉りして男
子一人うまれて月日を

ゑれにけり家にある犬十二月十五日
に子をうみてその子しくぬる
にかの女をとかめてひよりおそれ
て女いたくおそれて男にころさせ
とすれともころさゝりけるにこれ
女よねつく女ともにあくて
せんとてからうすやに入り
き其時はなちてとりかゝりてくはんと
くらんとすれ女えたへすして野

下にありてありしさうへよのか
まてなりける
帝王系図云同御宇三河国狐
成人妻云々
古塚有狐妖且老化為婦人顔
色好頭変雲鬟面変粧大尾
曳作長紅裳徐々行傍荒村
路日欲没時人静処或歌或
舞或悲啼　白氏文集

苑
夕良巻注載之　三河
五通の中に神境通といふ事あり
これに妖通報通神通なといふ
差別あり狐狸なとの人に変する
をは妖通といふなりと就てあなる
帝なとに人のよそほひ妖怪なる通
といふて又龍なとの雲にのりて虎
をうけるをは報通といふ過去の
因縁によりて龍となりてしかれ

報とハいふなりて果報の道にて
いふなり聲聞菩薩佛となるへきの道
とは非道といふ是ハ出世の道
到りていふも非変不思儀
なる道也これら二乗の道を
菩薩よといふハ菩薩の道ハ
似たり及かぬる理のなへき
おりておりハ
義 倍語なり

みづし所なとあるへしとき事とも
花 此厨子所ハ食物を調する所也
公私共に膳する所也
秘 尼君のまうけすへし此はし所ハ
食物を調する所也 義
狂言とよしめんを作りて人見るに
ちうしやきなるん
秘 変化のものりありけるすと見えしむ
多し

法師のかはり変化乃あるらね
よしと見しく見しらする
分し
志言ふすれてふもあらぬゆへり
人としらし分し
ひさう也きしあらぬ
兆常し
なをの所の人うこ乃流れらすく
侍もん

死人をやて此院よりへいえすそし
とうてれおのいふへ
きつねこそ狗やう乃おのあさむきす
て
樹神（コダマ）　木神魑魅魍魎空
谷響　大日経
左傳注曰魑魅山林異氣所生
為人害者也　歎（アナムリ）　和名久訓
けうとひとへきあまるてそ

こゝハ院の御領なれハくハしくかゝり
よひとれこそなきも
法まつりのきへとこふをてよひこれ
こゝへけるまて歌さつかなる
あやしれさ御りひさひとしあ
けて
尾とまりや
ひさひとしあるなハ殺のよりくる
様こゝ

私領にまかせておきてまうけさし
よ御様ん
よこまかりさき女すゝめ
法師ともの有りさまにて親し
これもあつねや従とらふ
打とるまけに尾とりかきのらふなり
まりあの所に見によせてみるなりて
くひおれ事に心へなるとし尾とりかき
り事し

天の下(アメ)はまんざのおりしやみすよ
義 備躬(ヒク)の事とかし天下中一の験
者とし
こゝ向はおもく
花 大木の下にみなわゆくつり木玉の
見とうつけるを
むらしありさん月もるるきなりけり
めおふてやと
花 朱の盤といふ鏡地かくまあり文

殊勝は月なし見の事ともあり
山法師するにようてこそつけるう
まさとみ分し
河 文殊は月無見く間勤り月見と
号るを
秘 月なし見は事
義 掛とアリ
いうさき面をとへしよこせんと
河 章 イカニ カラミ
花 いかしこそとふかうこしたけ

きんかうり
秘 いかしくきし　義　威勢かうりさ
かひをみすると
多かしまれ
何もあま達かり
春にくかりあへし
秘 此多則浮舟乃入あれ理白かり
哥 義
うきれりたにてそらしきさあ

義 垣乃下也野の下北名
池よとよくら御山りりすく康
義 池鳥しかり皆たもひの鳥忠斎默
まそても人のころをともんてたもけ
さらんい出家法師の儀りわう
すまとし　俗語の詞し
あみくも非まもをへせつま
義 つまやうい領や
人よとられ　哥 人よ役返とうや

苑或本云
私云横死者
須弥四州内北州
の人横死ある
ましきこと以千
年の齢有（下
東南西三州の
人は此難有
はへ悪思と
業りて云も
これと云ふ
人心横死に
あふこと
此事俱舎に
みゆる也或
律儀の戸
しや

普門品にも或被悪人逐といへり
これも横死し　薬師経にも九乃横
死あり　義弁
人はあらのこれにても　詠　ハカリコツ
まことの命乃ある
苑　横死し非命の死をといふなり薬師
経に九の横死をと出せり
苑　人またあらし迷ふなし
流れにもあゆくへいふかきなりにあれ

養　自業自得果の理みれはこ
これ大ところして
おのおのあらせねといふ人すへし
さらひのふる人のあすつよ
養　備前の母の事
あつりみそし
みふしふか
流車よせてありのすふあれていくしも
ふしうり給とて

花 尼君これまてハ宇治院にすミけるか
帰りねうか
秘 尼君たちの来るかし 義
おもはすに遠方
小野里にすめり
若くの事ともん六十にあまり給
なし
是ハ僧都の詞
うちとくまじきよものゝ寺にてみえし

葎ありさま
花 是ハ妹の尼君の詞
秘 妹の尼君し寺とハ初瀬也 并
いさてゆきてみるへり
妹乃尼君なり
さしわたしひきかへし給ひ是すなはち初瀬か
おりしける
花 僧都の妹ハ右衛門督なりし人の
妻にてありしか女をうしなひて

うきことおほかるよは心むすして
尼はみれるよし尾しらすと女を
中将とかいふ人の妻としてありけるや
いろかうなんとなりさへかねへ
秘 おしめて見つけたる人鬼や打
そこともひてありけるとい女也て
みさをめていふおそろしくなりそ
いときられけるし 奔義
めとかのはにあれあけたるに

義 浮世はさ陰みり
うきよの所さかれ經よみつていの所
仙 称分經
秘 心経と称分とて加持のまへり
まむとりり 義
まてりしてさくと
義 あの事とらし祠し事れさ陰
といなせまとし
あたり陰人よさうきれ

秘
傍輩のいふ事て
おそろしき事
義
いかなる人そと恐怖し
またかとさくめなれけみえし候
花
月をとりとて又なりくるや
あまたやいなりしくかりしといふ
人乃
花
妹の尼君あるらしむすめなれうり
よらんといふなり

中しゃ事ともいらんと
義
深海のすくなりくくい深せひのま
さらんとし
いまりて多りとあや しき極よう
乃人
秘
手習君れ詞義
何
不用
あのりやとられしといふなる
義
妹の尼君詞

かれなりやとうらむ
（秘）変化のものなるし（義）
（河）假色迷人猶若是真色迷人應
過此　白氏文集　古塚狐
二日ばかりこもりゐて
（弄）院へまかりしより二日ありや
ふるきの人と
（秘）母の尼君と此女とをとし（義）
それをうらみけるを
（秘）穴深し

故八条乃院むすめ右大将殿のかよひ
給ひしか
（義）浮舟の事をかけるし
その後さうざうしきとも
（秘）浮舟の葬送し
（河）葬送　雑事
（弄）浮舟と送し東の事し東らせ
給てわかれ東葬送せしを
あくる日の朝まで

さやうの人は引しねと
此人を八家の御女役毎は通り
やさひあるし
よく見合まして日八ちりとくしき
宗しきも
車とやりて家しまうら也
日ゆうれとをくしる見て
きるし　義
葬送の日は事しきく　きね

きこりやきくれいや
大将家い家の流むすあうら所房ら
し　会て
大君は事みら　義　葬　役毎は
事とちりねうら
姫家そしさしてもうり候く
荒い女二家は事とらて
女二家をとら　義
尼君まうしくみ候ね

養 僧都の母し
かくしもおきあれたし
養 天一乃方ふたかるし
とのくハれよりけるなり
浮舟なり
老人の旅にかりしハ
僧都の母なり
この人とふせてかくしつまりひとりのこし
そらひて

養 浮舟なり
秘 今ひとりハ妹の尼し
ひえさかりとよそのといふ所なりしそ
住給ける
秘 大原なり　養 大原も小野也し
河 横河知請より小野なりまうて
よるにひえの山也かりとおもハれそ
雪いとたかし　此小野ハ大原也
山しハ比叡坂ありとらなり小野

一円大原村也　布薩とらへなり
皇太后宮大原に住給ふ云々
時人号小野皇太后宮云々
大二条関白ノ女歓子尼になりて
大原にすミ給ひしを時乃人
小野の皇后と号せり大原ハ小野
の内也
東ふけてありしつきね
秘
藤若よれぬ石して　遊当のあるし

やましろう
義
俊頼の母は安俊也
りしかつらねところへもやみたまひ
義
菅原孝標の席にまかり
ぬ中人のとむかへけるに
義
宇治のとまりにかかる人にあひし
ぬ猶の人は宇治殿りしと答ふ
てまつひ出しけると続　母かせ
のすてとこそことも

川よりしてまとひし
浮舟のいまさへ心ちうきさまをおほし
夢かうつゝもしらて
秘 酒潮にて尼君は夢のうち義
けしやうを
秘 護摩也 邪気よれ芥子をた焼
のあいはよらくし
行 邪気物託し 護摩壇なり
焼芥子事あり

加持病とて護摩よれ芥子をたく
なり
四五月（シゴクワツ）をとる哉
秘 音よむし
弁 卯月さ月の事也 卯月さ月し
わが仏（ほとけ）京よりいそて給ひてそ
花 河ら給ひるれとけし 僧都をとらふ
詞也 山こもりをれちひありとも
京人出給ひしてそあつ免版あと

または何かなしうる人をまとし　僧
都をとふらはまてとは此坂本迄
りとこし　美
ほとあやしつのりまる子
僧都の詞
こゝつまりそうと
ゝ常葉尼
まうひおかさて
妹乃尼れ僧都の御りり給へとまう

こゝあり
さりらぬ人はものうしき事
おむさき不浄なる氣乃なきと
やや
おもふゝしうくし
秘
念比りや　弁美　妹れ尼乃僧都よ
いふし
みつましょりむつてくる人の
美
僧都の詞

人のみめよしあしハ
同 よそおいへく
見所未詳
容而人 義
くどくのむくひにてそ
端正者忍辱中来 大集経文
花 法華経随喜功徳品にし而恚
端厳為人所喜見云々
秘 戒行此功徳なりしとや 義
弁瀧談へ（まやりだし）

義 花鳥とアリ
りしさやとこそあらせしき
秘 さひより給事のあるれとありけり
義 排とここもろ事しもすさうとや
されそうせれ観音の給ふ
秘 妹乃尼の詞
ねはなそれぞんぬしとひてそ
秘 仏も経なさ事ハあるへ給ふし
こそとく

ちかひなき事はいひそくゝ

花
法花経仏種従縁起　　義 今案

一切衆生心諸法種子となる八阿頼

耶識含蔵せり染浄縁により出

しあひて現行して仏ともなり

ともなるなれ身には草木の

種は大地にかくれ縁をえて生

も出る如くし種あれとも縁を

えれは現行せは菩薩の慈悲

まし導すといふもそれ乃人乃宿

縁なきれたるをみちひきたまふ

縁となり給ふなり泊瀬の

観音も小野の尼にも御

なかうへ同なかりけるより浮舟

の君をとらへ給ひけるのち縁となる

ことのもとといへるなし　望花

おほやけのかしこきさきらん

義 公経なとも 愚せん恩道しるき

それむざんの法師にて
無慙法師
唯識論云　云何無慙不顧自法
軽拒賢善爲性能障礙慚
生長悪行爲業
色ふかきにはおぼれけると
諸戒の中には簾強罪はその外
かる止とも細隠罪はとし色
まさかあゝさきりのし　五戒八戒

十戒あれは簾強し　二百五十戒　五ケ
日戒　十無盡戒　一切威儀戒　未細
隠とこそいへこれ
戒法の中には色ふかき事なかりけれ
ともとし
河海の流をもて不用し戒をせふ
事なかれとしいろりつゝの
翔なかり
比丘は二百五十戒　比丘尼は五

百韻

女のすゝよつけて

義
女犯の事

范
法華経安楽行品云文菩薩
摩訶薩不應於女人身取能
生欲想相而為説法亦不若為
女人説法不露歯咲不現
胸臆乃至為法猶不親近
況復餘事

今さらにいりしことわりおもふんならてさへまさ
よるこそ

秘
今ハ身とひなをとさへいとゝなを
おもすとし

異
これも何とかしけるる事とを
私これハ女子ともに何をとらす
よつけてハ増能の親し
まことねんともの

秘
又女子とものいふへし
范

いらしき事ともをもちひ給
弁 引声の心を引ふりハ卒生せむ
浣習れ引を出時の聲りうけて
いのほし 義 秘
人よりうかりして
秘 よりまりしせ 弁
てしせうまつく
徳 銅休まり
義 とての人ふみするまかり

むかしハとをきひ聴し法しの
いさゝかまうせしうらみをとを
めて
秘 緋青鬼の事とひそかり
義 金峯山に引者 緋青鬼 柿本
紀僧正すその事とて下んりて
うそつり紀僧正 真済ハ 恵亮より
仏法のおそりて魔界よ入て
何よ慈恵僧正の時よ得脱して

慈恵ありて生るゝ也云々
真済僧正の事見河さぬ事
ありし御みえしや
貞観七年比染殿皇后為天
狗被悩積経数月所有験僧
皆無敢能降之者天狗放言
云自非三世諸仏出現者誰
降我亦知我名云々　爰相
応和尚応召参入両三日祗
候無其験還於本山奉対無
動寺不動明王啓白事
由愁恨祈請于時明王背
而向西和尚随坐西亦背而
向東和尚又随坐東亦背而
如元向南和尚亦坐南流涙
弾指稽首和尚自而言相応
奉載明王更無他念而今有
何犯過相皆如此乎願垂悲

懸テ告示云〻　胡跪合掌奉
念明王本誓合眼之間氷夢
氷覚明王示云我依生々加
護之本誓有雖去之事令顕
説其本縁有紀僧正真済存
生之日持我明呪而今以邪
執堕天狗道着悩皇后為思
本誓護彼天狗仍以我呪縛
彼天狗也以大威徳呪加持

者得結縛之使〻　此告元
後不堪感涙頓而接足礼拝恭
敬後日依召参仕明王教勅之
旨奉加持之間結縛天狗自今
已後不可復来之由帰伏之後
解脱乎則皇后復尋常云〻
或説云むかし染殿の皇后御
なやみ此時金峯山より久修練
行の行者まいりて加持し奉り

平愈の後本山にかへりて年
来の行業を廻向して誓て鬼
をとられても紺青鬼といふものになり
后をとりつきてまつりけるを
を智證大師行人によりて教誡し
のたまひけれは紺青鬼たちまちに家を
てそれ定よりみなかへり一所のことくに
なりてきこしよりそれ後后もと
のことくよくなり給ひけるとそ

善相公の説にも見しありて大師の
此事はすきさうや此浄蔵上人朝
懃上人本如此事多し
よき女のわきまうすことのありし
苑
宇治の優婆塞をといふふみかうさ
つくしまひてとひあけまきされ大
君なりし
行
大般若經に如有女人端嚴巨福
菩薩吏野攝護者為惡人之陵辱

うき人はうしすきひそしよ
蔓 大君なり
この人はうき海と世をうらみ
蔓 浮舟なり
観音とさためらるさためり
泊瀬の観音は大悲をさため
つきまとう人をあはれみさけりや
秘 浮舟はよりさためし
はしきの心ちは

秘 浮舟なり 花
ひとりうし人のうれなくて
花 さ治をうし人のうれひとりも
すきとや 浮舟君は風しくしく
性よりて思ひ侍りし
流まとくとなりて
蔓 男とまもんとせし時の事しと浮舟
の心よ思ひそてるや 花
家とさきうし人のしまいを

花
霊の人よりて見えけるを白
衣と見しなり
秘
白衣をとむらひしなり 叢
わかれをうせる
花
如在意しあをとゝまんと請し
事也
私入る事なり 叢
おりくは日てる日あり
秘
六月の時なりえる人し 匠

屠らるゝはゆるさるに
叢
浮舟のかんなりけりてうし食事
とも用すとや
いみれいうく
尼公は細なり
うらえくねうさ
花
温気なりねるけは事也
叢
まつひのうことくえゆるとし
きくたゆむありなく

尼君は忘ひあつかふさ侘し
心よりはいとこそ忘すへきと
浮舟の心あてことゝけちやとし
いと忘う称して
浮舟はうく忘ともこれかせうりし
ていさうは命なれとつれなし
とし
箋
生る椋もや
いやもみへさと

むかいちうりとうけさもちは
箋
五戒し尼の身よしちうし
心もとなきれと
浮舟の心尼りう身すよしちうり
するとも心もとなしと云
あまたしく我人の心えて
秘
うき舟の心やりうみは人とも
箋
ぬとさうやうにいひあさうめねへし
れ心し

髪はやまるゝ人

浮舟の事尼君はむすめよりさひ

まさるなし

うちつけにつれとなくしるかなれ

哥

髪はいつしきさ海し

一とせたらぬつくもかみ

百とせに一とせたらぬつくもかみ

われをこふらし面かけにみゆ

(花)業平中将はしりけるは女より

こひきてしよめる哥なり

伊勢物かたりは老人の髪海の藻をたとへ

くねるよりさまくにおもひてよめる

としよりたる女とものあはれを

いふなり

(秘)老たる人をあはれみあはれかなし

也 升髪

(テニ二)天人の御みなれる

義竹取の事をつゝき序し
あやうきかちまれと
天人すとりて此人乃うせのすひ宿
りとあやうきし
秘此段意皆竹取の翁のかくや姫なと
見る時の心よそへまち
うつほのはしくせひきゆゑに
尼君の浮舟をとらみそいふし
ほとぬりしとせひて

浮舟の心も
まへつくおほきさきの宮の
身を替し宇治乃宮の河海たゆ
危し
義草花のお焼りりかく此をしあり
とうく
かくや姫をとえつけうかるん竹とり
の翁よりも
花よの羽りいきしき天人のあまよ

くされはとうくらんやうりうけ
ひとわりせてうくや姫をはらとい
しませると
秘
かくや姫の和鏡の名なり万葉の歌
とりい侍られり
いうは掃のひまに
養
紀本名のねといふなつけてかくや
姫のやうなるいかやとそきこえやらせ
まうんとし

をのわなしもわてうけ人のかなり
花
傍祇の母君をいふなり　弁
むとせ此わすれ君いかんくらの此乃ふれ
ききとそ
養
傍祇の妹し浮舟をとらひわつらふ人
花
小野尼ハ右部木精の将宣しようり
志るせり又蔓のうき橋乃巻りりを
尽しるなり
その人すいなりわらく

妹の尼君の事し
よき君たちをむこにして
箋 来よりつゝ女持し
こひわふる人のうへに
箋 むすめの事なりさてよ浮舟をとりなや
給ひかふこれと
秘 尼君の事し 箋
昔の山さとよりハ水の音もなこやか
なり

秘 宇治うつり 箋
宇治院あつまりしきみのをと
といへり小野のハ音無乃瀧や
いふ名しなこやかなる和の字也
門田のいねかるとて
何 伊勢物語云ゑのこのなにおもしこな
うちとけふ所よ家つくりてすへ
きりそこのとなりたるもきりかな
なつまとめうさ女とものなたまう

なりされは田かもしとて おもしろの
ありけるとて いふしれ よささむ
めしさやとて
ひさこさすらとてとる
秘 やしおつまりれ
浮舟れ名なり 并
花 常陸国くてのまし
めの夕寄のもんやと可れおちと精し 箋
可なりい

花
箋 夕寄巻なりとする事し
薇葉れ御可なりい 此奥にかくてや
侍し
草子地なり 上可乃 地那をとらし
かりけひとそらまてとらかよく
白とさりて見侍し
并 此詞を双紙れ詞ふ侍し
浮舟の事をと云詞なりい侍し
らん

山よりかゝりける家みえたり
山のさけてすぢかひみえて　哥
かもあかき
ひとつ川わすれ白もかりし　續
アき
此詞は又浮舟の心をよくへしといひ
出しまゝてと云詞より浮くへし
蒲団みゆの心
女将乃尼君

秘 小野の尼よつゝけるへし　哥
かくまうしぬや
秘 尼君浮舟よそふなり
わすらひうるゝれ事也
昔もなやしかりける
秘 浮舟の詞
私浮舟の心也
花 つきさりけるへの心と云ほ
年よりたる尼君ゝち乃野ぶひ

こゝろなき

あさくさやまさりけると

両義
浮舟の身のうへをとはしらて

てなつらひけり

秘
世より身君とはいへり

清濁
取をとすけし彼の川乃こゝろをきさ流る

ありこのけてるれるとて終し

河菅家
みつまゆく我はこ川とおねとる

君ありことおさてさしめよ

両義
維ありかしとあて此事といふを

行末もうし彼わくく

秘
行末もうし彼わさしとて

清濁
流れかくてうき世中りかくなとも

これらにありし月乃君やこゝり

秘
むねあられする哥もとおれりめて

まつ川の事をとありひとおさ海や

うくおやいつにまきひ給へし

身は海は母君かのとて此事右邊

うすくともありもやらぬか
わかきへのかうは山さとに
秘 此山里にかくうさへ見えるなし
とかや
なしろうてまてゆきかまし
此京にある家のくへ乃末かよふ
中よらひつらんて蕙白なと 北
かゝるへきつまくりてふるく世に
らしかや

多く侍従こもさとて
河 上東門院の女房にいぬきさと
いふありけり栄花物語にみえたり
此物語の中にもいぬきさあてきさ
まてさうすしてありてさるへのなや
又野宮歌合 源順判 作者しも
たこうまさるとあり見明家集
むかしなしかくらすはとなれし
河花 名本しありていまとさん哥多

わかせ人はおかしやと
花
昔し歌の人といふ人ともく歌
為と詞をとゝのへれるなり
みわかせよ人はありやすし合せ
とは腹ありしきれと歌為よ縁なれは
きひの字なし
秘
花為縁取弦勝し　義
弁
歌の人よ縁となく人すしとき合わ
世中よあらね事はされたりやあ

らんとそ
花然八
よの中よあらね事もえてしるら
としるにけるかさちりくれん
秘
おもは世と分治してその贈答此事
をせひ出家し別乃引寄するを
用ゐたり　義
義
うき世よはあらね事とりとめても
君かたりと兄なよしもかせ
浮世の世此よもし寄りとおりひ

なそしるや川奇怪なり
よろしかるへきゆへなかなか
浮舟の事し事のよしひなか
人そりと尼君もくるし
わかくつとみも
花 そこよなからへのものくるしきすい
秘 さうせむとゆふになり
尼君もかくしし給
むかしのむこ

箋 尼君のうしなひし女のむすめとや
おもふらんとのぜんしの君
箋 中将のすみなり僧都乃弟子と
みしなり
横川にかよふみちなりけるに
横川へ小野のかよひみちのかた給
なるへし
さねちかとひてあてやかなる男
花 中将も小随所をとめしくすゝ給

よりて我か歌を叢すへからす
弁 中将もさゝとよせ給はせて
の事し
しのひやうそおはせし人
秘 浮舟のなりり薫の事すとせひ
出つゝ
弁 匂宮君の心自の事し 義
匂宮もいと心うそこさ
弁 宇治の山里よそひ申させての額し

かきかりうへとさこ歌きそしと
義 なそしこいとくよりは何くなし
女郎桔梗の秋の和かれとさゝか
りしかゝるとよそう
女くれかりきねすると
中将のとりのくつとや
君もおかしさしそく
義 中将も狩衣とさこてると
とし九七八のありと

中将の年齢し
弁 六七とあるをもていつれもそもなて
なん
人のうちね
裏 心ありとして
よしこそのつりかまよ
秘 尼君の詞
人乃うちありされたよもみしらぬ事
伝 とも

裏 中将の詞
中将の人のみかるもみしかなこと云よ
是中将の詞なり
私人乃うちとけかたり中将乃詞
然へきれ年來かきこまし ゆへよるもみし
事とも知りれねとし
すへてのかれかたすは
秘 尼君の世をのかれしるすゆねゆへり
とのつゝ誹をもなしてし

花ちるとも世にはなく侍なりし
これにそのつゝ中将のきこゆ
事をあひ侍らし
山こもりもしつゝ事なく
趣別 世をすてゝ山住もしてきこゆ
とや
法ねは出しら侍ると
細き事りしくおひて出立にも友
まちうるの月花ありてなりこへ
立

よしなき事も侍るとし
志ひまをいさかて
（秘）月花すくさしてくいさなんを
とや
事まいりそうへかさすゝて
（以）晻（ハフリ）着 日
（花）さくまり出て侍ると友にちれ
のあはしくはされもまことこひ
侍るよさ侮らけられてとうしうら

ゐし侍るまつれはそのかたをもとし
つきすそく出かちなるよしを
かくれはし
山さとに思ふかやまい
秘 尼君の御身なり
いまゝうちかちは此あたりをひ
義 これは人のまゐらぬのあはれとやいふなり
むかしと云ふしてまつね
義 むかしの御すまし

私云中将甚好色方よりありしと
見えしうちこれを世ゝしなむひこの世
給ひぬとの心云なくしよ家中納言
のもとへかよふとこそあれなし小野
尼とさひ〳〵まいれるとよかへりすと
いふなり
人のまゐるへきやうれしくもかくせ　水飯（河）
秘 ひめれ飯といふ物を
こめといふ飯とも又ありしいともも

はすのこゝろとやうの
蓮子 遊仙窟
秘 蓮實也 養蓮肉也
并 れうきみわ
れん 蓮子數盃妾令酒柘枝一曲
鐡丟歡 禾奘
酒釣迷毒迷推蓮子燭渡粘般盤
萄蒲萄 曰
一統云氷飯并 盃とそへて制し

けるの菓子の中にも藕實と
くいてる事いろく見ゆるの
或云夜の寒されし藕實も
なお侍きよあらを盃とゝもに
のこといれんもあまりり上手
めてするの 延河
いふひるく知ちしかりも
秘 良君のなかの中將とよそへん
よせんかくちおしきこと

まうそれうきとうに
秘 いつもすあみもみつうし事也
義 不及引哥て子のすうもし
ますみり此義迄へし
とりんうるもしらそへし
秘 此尼君也
義 浮舟の事とかくるもいつ尼き
とし并
ひめ君はよれをわまとおもひいるか

秘 姫君は浮舟なり尼君は昔乃
むすめのをとおもひ浮舟は又
我身のむかしの事をとおもひ
出しつる
義 自身の事をとおもへるへし
ちうさひとくのいとなさけなく
あさやうに
花 あさやうそゆくはりしうと
いかや

この袖もひろさなかりけるにひろけりや
ひろりも見ゆしぞ
橋皮色襟　蘋芳とふしろみと
そてはかゝる也　生衣の人多分
着之也
花 橋皮なるは西蘋芳のりしなきあるな
うら花白とらふかり
秘 尼の中にりすきのふゆくゆり
それなみれそう袖もひかりさな

なるへし　義
義 なうきとこそせてまいりつれて
紅の衣なりなりけるし
こゝへしくいらしきつう
秘 浮舟衣裳のさ袖なり
こゝあ君のありしとんらぬと
義 尼君はむかしの女なり
おなしくはむかしのさ袖にて
義 中将は浮舟とあわせてきこと

あそはしや
秘 手習君の心みかり
むかしの事おもひ出しつゝなくさみ
さやうの事あるハ絶る自害なれ
の事ハ忘ひ出しまえて何しかし
むかしとし
せめとらひしく
尼君のつかへかり
むかしみしへつは

尼君ハ女のむかし時の事とし
流されつゝみれねかし
少将のおもとハ事中将君かり
みれねし人をし
かくしハつまらゝつきみそに
秘 中将の廓ハつまゝり入つみ時の
まかし
尼君ハ内へ入つる時手習君とかへし
かり

私中将の入つる時の筆延へさかん
風はさうしかりつる
秘 雨のふりうらうらときゝなし
えてのさ海ホれは
箋 浮舟をすされのひまより中将の
みえけるよし
ひめ君は立いてゝのそかりつる
弁 尼君は奥のかたへ立さりけるのち
し事也

秘 少将の尼なり
昔へいとよろしくおもはるゝ人なりし
箋 尼君は女の事也
色みしれたとと手れくく
秘 少将の尼なり
箋 尼君は心りし女をとりかへされくく
なり
おもえぬへとえてとらりなて
箋 浮舟を尼君はえてはかなし

めしなき事にてはありけれと
秘 中将のたとし 箋 浮舟の事なり
このましみもいらに
少将のありとれくりしらてこえ
尼なり
あまりやさね月もそれれへし
箋 中将の借れ人の云
ととさえへしとありて何ゝなかな
らん

河抄 おてなしもなに自なりんとさすへし
人のならひさうなくき世り
秘 尼君めしなか所よすさまなあや
しきとし 引哥河海弄
箋 引哥河海尼ともの〻ある所とさく
みしまといふん鳥し
人のならひさと
秘 くされしんなかなり 箋
弄 小野のくさ中将のくれならひ

をさへのふとさりうすてらふふ
ぶらすり
さらけふるおもしまうりしくらし
（業）中納言よくつれおもしろうすりかゝしの人
ゆうりしころをし
むしのうつくて色も海ならと中将
よみかせてさとし
右中納言は流りとうまれ
（行）朝貫大臣息
小野尾のむこれ

中納言今日は人の舞君はなかや
（秘）敦頼忠の息とこく又別人とも
いゑりらまそもし（業）
（哥）中納言はかまひし所し何海よ
乱舞りは事とらゑり又一人
しらべさし形とものさて紋く
あやの衣うらに
（業）中納言はあやし形ともなし
あそのこおりしつそしばらん

是よりハ尼君は浮舟よりわかく
らふ﨟し
（秘）尼君の習君よりハ上﨟し
おれなとせ六とせ時のまゝ忘れをて
尼君の女なる年さりもせゝる
なるへし
さひさここんなるふつきしく
（寒）浮舟の親類共ニ立しきしく
よりし世ニなきさんとありひ定めん

かとといふしてあるへしとあ珍
とし
まへ川の事さしあちきなきもの
月日とふれハ腹おれ色うつりいハ
なきおそと立つきと忘れさせんもせ
ていひなすし
いとくみさくまて

故ハ人もやかましくいひさわく人多かりて
いよいよしくりよりされて浮舟
のよろしきなむ

花
是ハ浮舟君のありさま
なりてさてゆるしも侍りぬを

秘
手習君乃朝観とてそのむ人さく
もなされて尼君てられてその
りしくおもへとも
ひさみちよてこそむましく

華
浮舟の尼君と云ハ尼なり
ちゝさてそ海りまぬ給へる
尼君ハさまなり
こ忘なりとおもひ給ひりぬすを海
せて
中将の横川よとおもひてのさま
なり
ぜんじの君とゆかりある御流

秘
中将の君也　菱早

なれよたちよりて
(秘) 中将の詞なり
世をすてられと
(拜) 小野ハ尼ともハ事とおもへり
まいとすくあらしけるか
(義) 僧都の母なん
とのつゝゆかれて
法師みちのありてよれ紙わたね
仏なり

せんしハ君この甚たしうり
ますて
僧都の君僧都ハ事乃ちにし
とゝまし
あはれなりけることゝる
又中将の詞
むかしおかりつの心ちもするかな
(秘) 猶昔の物語なとゝきこえんや (拜)
私自案ハ掛よこれなしく

大かたにむかし物語めきたるなと
いふや
みな月はかりのみなも
中将の御かたより文小野へた
ちよまし是ハ浮舟の事下に
あるへし
いとしめやかにわか君ハ物しのよ
中将の文さゝめかせよろこされて
むすめある事をきひ出ける

さのひきゝ給よおほしのかんハ
秘 中将の詞
私浮舟の事をありなかり
こゝろしられと
秘 尼君の心うちわすれさひて
いふより尼君の詞なり
いと浮ゝふくしのゝ
女の事の忘れかたさよと云
いまはなかいとおもひしけき

花 おもひしけきはおもひしらぬ
さ海かな

ちらつけんなりて
花 ちらつけは直のんなかな
秘 中将のんて
ましておもしよそふらんとこより
つけては
秘 昔のなむすめにもひよそへのみて
とし

業平 浮舟と承女のうわりとおかさは
りこのましく我和よそんとらふ中
将の詞也

中将 あさし哥の風よすひしなとこゝす也
これしめゆりん尼さくとも
秘 あさす深かせよれすひさきそとや
ゆうし哥てり名所とい深菊われ
とこ名しゆきすりとふ名志う深
為し京極黄門もり名所なら

に不載之云々丁寧篇
長暦歌合よりさきさきはとかく
わろし歌ざまにても申もあら
さだめしとして是右勝負野
家歌合判云あるへし野
こゝらくねくやあらんかし勝て
まほしくもなし清輔
判し抄にハ右勝をなて負にしるし
ともさせさる事ありしよし也

いふなるへし此すこしふ称く
此ふくさけつきのある人
尼君中務の事をとひなかち
いとあやしきになれ
後兼おもひてみしかね
きこしさせつるは
秘おもはせあらて人よりさらきまん
事をくおもひけるに世おもてとらく
る事也

私これハ尼君ハかくこそ思ひし
の詞と云也
此尼君 ふるしくてこひこらるれなとこそいへ
うき世をそむく事ハいかゝは
秘 尼君ハ奇なり 箋 浮舟をさそふく
こそ侍れ
あさましさも思ひしと
秘 中将の君 弟ハことわりや。
也

箋 こゝにハ此庵あるからうけよみす
さまかねハなとりてをみて中将の
さうし
わさわんすち
浮舟のおもひよそわされと中将
のさうし
こゝろうり此のそうり
河方 いもせ此ハ秋萩しのさ給へて
箋 中将の小野へ行し給し

まいの尼よりいひて
かへの尼君より
いふべくもあらねば
浮舟の巻にへさき海かつねて
まつちの山のとなん見すなる　尼君の詞
誰をかもまつちの山のをみなへし
秋とちぎれる人ぞあるらし　寄
貫之集に載こ有て
秋の野にひとりそよれる女郎花

こよひたれの宿とかいさうらん
（花）小町か哥とてよかるへきか上り
女郎花の哥あり下の句より
秋をとちきれると中将のいひ侍り
（秘）引哥河海抄にもなし　一義あり
一義ハ此尼君の浮舟の名をもゆかし
さりなからそれより中将より
契るともなしとや　又の義
いまある君の姪ふかくして

打とけてわものゝ紛れさるゝ別て
かくさ給へありとし 此說忍ひ
（筝）是ハ別人に浮舟のちきれぬ事
なきする人しと
（弁）秘ノ筆ニ同し
見いめんしの人ぬをも
（秘）中将よ尼君の対面
たく御し ぬさ給そ
中将の詞

ゆるい給まし きめへきよ
（筝）中将のあやしかれ事すゝへし
たなかまけするへのうつゝくを
しらは
（花）若しきやし
私屋しら給し
（秘）心ちまけするへ我身ものいふさ
りしうすとし 此けきあめ
色ひれありさ給すはへ てそうち

かくれなくかうすひされとし
箋 深草のみかとの中将の一具なる
ことなるへし
新 秘ノ義ニ同し良峯君乃
りのあそんひさきの中将なりけり
こんあかし
なかよけれはね給ひとひい
箋 在五乃君也 秘
ことさらにねさ給

良峯君は左近中将の一具とし
ましのへてはあるへし
良峯の在よりもんとりの事し
新 良峯君乃事也と云
のこりすしきよそひのへりに
箋 在君は身のまとりふし
新 在老ろへりに世をかれ
そふきくし儀りそしとし
世をとかくる所りそれ

花 世これあるといふ詞とおもはれし
ころさへとらへて
私行まとやしとや
あやりていふ
箋 尼君は実の母なるをさていふて
いりてもみさけるし
箋 尼君の籠中へ入て見たり
いふ詞し
人のおもふこゆへん

秘 手習は心つよきさ歌し
箋 手習の詞
いはらずふ心り秋とちされぬあふする
しのまよてそ
中将の詞し
秘 あのり ちとうけていそいそれと
ちさきつめのそと乃行しと
とりすしてかくなむかく哉
ちらり箋并

中納
中川出の歌とあつめてまいらせ候
又藤なみの歌まいりまいらせ候ね
秘
松虫の尼君よりかしこしてくたされ
我身ともまいらすとおもひて来まし
つれ〳〵なるのやうにてつれ〳〵つれ
あさきゆくよそれの歌よりまいらせまし
簑
和こゝろみ歌へよりもその歌は
みなさとし手習君のすまひらね
まいらせ候

あはれしとあしこれをと心をそ
逢事とこしのくとくこれそ
のこれし
いろなとみしみしあはれし
浮舟の海
明月君ものかい
秘
なかしとりうかさ時もし
藍
なかりい昔の身し
逢尼君
秋乃田乃庵わかこゝろかり衣

むかしわすれぬ宿よりこつるに
秘 野べの露をそこそあすかわば風
その露けきそではなくさと
みかり 箋
こころしらずのひと
むかしの宿はとうぜうあかさん
とうかしらずとし
うちみもなかし
秘 まつる君は忘すり 箋

世になかはとこころまましりなると
人にこころなき事をいひそ
おなし君をもあらはしいてて
此中ぬのおへせんすとくちぬかな
とし
よのつねのすかたちよれ
実事なきそすくともおもしの
いへかくしのへこうて
箋 まつる君は思中をはなちて中

ねとも何とうれとこそはへのさよ
ゆへにこりしくはうくらふて
うらやくきりしき
（箋）年よりさはへのとあくとらよ
かこりすくうきみすわりと
（秘）名君ハ几也し
康ハすく猶にすと
（何た）山さとハ秋こそことにわびしけれ
康のうくねよめとさ問しつ

（秘）引歌何と問し（箋）
まよふにうちすくハ
（箋）よの人との中ねとなむうよた
こまそうくうそすま名君ハ凡みか
色ふしかこの
（箋）尼君ハむすあれ事しとらの中将
の詞し
ねふしめてわりれとおもうすへきく
うさかうけるれハ

まろ君のあひたまりしことさ御
とうえてこそし
（秘）あはまてはむかしの事なとひして
らうしや御姫君はおりひすてた
ましへしかくしもすしとて
見ねむらちもえありひすましう
（いたた）よのうきわひしねむらへいらんは
たまへこそかくしみかくれ
（秘）引哥同世にうき猶見ねむら一

いかんもやすき事とて
（基）引哥同中将の心
（寿）世にうきかれ哥とりてとちらま
御君にすひとさすはかくしから
ともへことさるあるまましかて
いそりそく
秘此義いさしら不審案くよ世
のうきかへしねむらつとらんて
此かんかそへ引こそもんとあり

ともに君のあはひありしかもし
さき氣をかれは此小野をせぬさき
わかんとねもとちるともえありひとすゆ
しとはなりや
筆
せかんとありひとしぬかしなはいかし
花は此山なりせかんあれたその
ありかんかあはひありるのはなんとねも
ちかもえせいなすましとはぬ
むかしなり

すとあさかほをしらんしき
つゆ
蕣（アサカホ） 日本紀 あさかほ月に
花ととあるのしくれは心もまよはん
よのかんせるや
花
万葉にあさかほは 快夜又新夜
ともまかあさかほしくあしさ
東の花なり
たれかちらすのにさらにもならぬ待わかれた

花 帝は朝まつりこといはゝき見出し
給ふ事
秘 引帝来勤帝すくていし心得へき
事也 箋同
おしふる色をかけりともひも
中宮の后にてり浮舟のことてあそれ
まるさ給ふとおもしけれさしと
ことて
先の頭さへおかし

花 尼君は筆の跡いかにて中
ねなとしかとて帝をよみし
箋 尼君はこて浄ふり
尼君 あはれさ東の月をおはれとみねへや
山のこときさ宮りと思ひね
秘 おくのあそて東をこ心所朝とと
うけりてき
箋 前は高山花繕をきと中な
の月をみそてむへるところへん

とこひそ下の人は尼君のよろひ
うちふさて山のちうしゆなり
これをおほれとは御らんせねと
これあり
御うちとうみ事をとうすへのあふ
とりふ
秘 尼君のよめはと尼君のいゑ
つりし
弁 ふうきある君のとあるいをと尼君の
よこはをつくへのうくとつる
つうるや　こく
私秘ノ義おうつきのし弁ノ義
然へきれ尼君のうとさうり
弁鏘しるをつくへのとり
これやしてらひつくとはとつへ
うもり
はときかめ給して
箋 中将のはうり尼君の中将とよめる

君はうくらひひらんとてかく
よミてとし山かうさせて
山乃さに入中てて月をとなりわたらん
国はいさまもあるしありやなて
秘 錦やのいさ海とも山ねのありひも
こゝろしやとし
あのしあまた君
秘 尼君の母し　此段物語は難言よ
うきかり 義

むかしは事ききけていさは
秘 昔の尼君の世の中ねすくらふ
事さともよしもうきさまんさ
ふかし 義
あひうねすへし
芳子の後く
いてされうんのことひきのく
秘 尼君うらむすあれ尼君つり
以家羽弁

にようこかうい

秘 女房にあらし にようとは今の世にも
ことに人の名につけていふ詞
みな此義

河 更衣にかういとよむを
こゝろうる僻事也 かういとは
とはなそといふ詞也 何とそさらといふ
賤女の通稱也 古今作者にも
更衣とてあり 貫之か童名を内教
坊阿古更衣といへり 当時も過去の
下女なり 何くそといふ名あり
けなん

花 うつほの物語にも此詞あり 京く
そしらるゝもいふ 更は童女乃通稱
なるへしとみ乃世にも何とそ
いふなるへし 女音通せはなと
されなれとと
中将の君なり これは花散里母なり

と振しうるや 弁
さゝめらきに世そ
秘 嫁女は中納の宿とへしすひてば
老尼のまつへゆると石室の世なて
わゆれはせふや 義
昔ふしありしうも
秘 尼君中納の笛とうかへしし
山かせもの
秘 いやしき弁かへゝし

いてやこれいひかことに
尼君の銅琴いひかおりえのとな
らんと并下するし
いまやいおきしくてのんの
弁 ひとかれ尼の琴しくをとこえ
まり琴のことはとの世なとらく
へもまれするおれいまりしくめ
つゝしと中納のさくやも笛やう
とは菊世ゝのまね事し 此菊川とと

云心ん

（花）中ねの亡ふ心なり

（秘）中ねの尼君の程をと感しけるし

（河）嘵々俗人耳好今不好古所以

北窓琴日々生塵ホ　文集秦中吟

松風もいとよしもそゝやと

（河）松風入夜琴　百詠

まみまうひもせん

（秘）大尼君し　花

（箋）老者ハある猶し

とゝのひむしし更まとゝと

（弄）媼字し　老女乃心

（秘）老女ハ猶し

杜大尼君ハミつゝうつしきとらふ

みりあつまいの和琴し

念佛よりうりのあさゝさい

（河）万事家生皆捨離専心發願

向西方

しのひやかにうちうたひて
秘 中ねし 墨
あやしき事なと
花 中ねの調し
墨 さらくとかするこゑあれ
墨 極楽浄土の伎楽歌舞乃事なと
こゑし
こし傾けやとするせは
墨 中ねの声きこえしらふなとすれは

まといかり
いとをしとおもひて
秘 大尼の気色あはれなし 墨
とのゝ子乃くそ
行 されはおもしろき夜なとし
秘 とのゝりれ君とらふし 墨
昇 さ夜れくさや女れかれよ夜ことよふう
常の事なし
同じとのゝりれなるものゝやうにて

一動とのりうは立夜察せし
それ彼庵の下部まとせいられ
の庵よりとりのうやつこいあり伴
部ともかくし
いとあはしくてまうせける
大尼君のいふよまかせける
ましも笛の音ともうけ聞き
笛は盤渉調なりしとそれけりも
ふ尚の大尼君の和琴しとよ

心乃ましきこち
とおいて忠やかうたと
笛も琴もあわせさるとは和琴よ
めつらしと大尼のたつふとし
こう庵の調子あはてあはしくてつけ
みしきゆへよ琴やかうなん
しけふちうりしまりたうれと
笆は笛の緒のしきこゆるやそれ
と和琴よ尼君のひきさするなり

唱哥のことはおほし　後拾遺
箏の緒の琴ありしろくきこ
ゆるハ花ちりうつとおもひけハな
つきさり

秘 箏の緒を唱哥にすかしうけ
弄 ふちちりしちちり唱哥し
一本ちりちんちちりし箏の唱
哥を和琴によはしてひる
もるし一本タリタとナチリく

タリタとナ
ちとはとるちりふしふる佗ちり
弄 羽とおとにハ唱哥の事と
いとおりしかり今乃世よきさし也と
とは
中将の和琴にとうむおかし
弄 此羽も見と
月花おしの人ふ姫君
末雷ふり

これしこう
大尼君の自讃し
弟の禄いとおしう
中将乃かへりたりしかは弟や
よいうしく心ちうれ
花 中将の母のこと兼し
ふりまね昔のこと第竹のつう 秘
こふしいも稀そうれけり
弁 尼君の女の事を中将のうへ

おうなし
上るは尼君の女の事下るはま
おる君の事をいう
秘 おりしらり
ちおる君をといひまひしりくみて
ふりの義弁
これこれもへくは
秘 我身の母ひとりことを
いとまひかなれ

秘
尼君のつ弁

少尼言
ふえの音に昔のこともしのはれて
かへりしほとも袖そぬれにし
昔のことゝハ尼君乃聟をとひさし
心もあるらんへハあるへし
あやしくおもひこそぬれや

秘
おまよらうあさるさなみて
いゝ经のはと大尼君のいひし
事みつ弁

私説ハ浮舟の心つれなきさまなる事と
いふへき也のとりなりハ大
尼君のいひし事なるへしか
やうの情にあらぬかたちなるへし
いふ本もあり

めつらしかりねも

秘
尼君の返事なるへしや笛のねを聞し

案
尼君の心にかなふてかうねをとゞめ

萩の葉にかよひねなくしつけて

とこつれらは

(花渡氏)おこさのうに吹るて行秋風かな

又たち思ひおもふらん

と案じれたりは浮舟君乃人を

しのぶべし

(養)夜ハ斉ひ世中ねの荻乃こゑ

風のおとつまし露より細くく人をも

いひあるともつしくいふまでまれ

人の時分秋ふれるとし

人の人ハおもひうちかは

(養)白髪のハ事にもいふさへりしるかり

いひちぎりさすへ身さ海よとくふし

れはかひてもよ

(花)尼になりしのひてもとや　(養)

世中にとおもひはつれと

まあるれ世をといひすてゝしるさと云

ゆうれのとりの

(養)観ここの一字とまる

恋しき人のうくも
（義）尼君の女乃事し
かくあらね人うき恋し給ね
はま智君とてもむすめのやうよ
恋して他人とは云ひれねよしや
あつりたちて
（義）賽（カヘリてテレ）氣らうしのやうて
うつりと氣とまさとよれける
智とえさ宗悦やし いうそりやう

とうり
いさ多せく人やれもうん
（義）尼君の手智とさうて
むかし母君めのとみとの
（義）手智君の心みり　手智の母や氣
母の事し
多ひしめりてさせしと
（升）長岩の親吉とものつうしも
ましとうてりよはしうの心みり

或は仏の法をとふとみたてまつる
事もありてそ候
いのちさへありけるなれ
入水せんとせしもふねよりおちしと
我身をは観音の利生あらさ
とらへ又は波浪不能没のちかひ
もありけれはこそたすかりし
身をなけんとせしもなかりけれ
たゝ命さへや

命をはたすかりしかたしけなさは
何とかれのかなしさ
私渡リ云
なこりをさ渡りしは
観音のみちよ利生あらたなる事
まことにいたはし
ありかたきしのなつき
物よと迷ひしゆゑしかるへきれは
と尼君のせられけり

ちかくして世々よる川北かきの流よれ
なかりもゆへし二もとの杦
（何れ）はつせ河なる川のへに二もとある
杦をといへるも是なん二もとある杦
（花）二もとの杦ハ白文蕙大将也かたち
をとこ出すありけりやこれも是なん
といふ哥よりて尾君のたゝふ
まことにいひあてゝなるへし
（秘）河ゝ引哥アリ花鳥義二ありふてを

白蕙といふとにて此説ハあまたと
なかれ九ハなかし弁をとなるとも杦乃
本ついて了ひ紅色うつすこし
（義）分やうりてまうつてもうひまきを
うき流きとや是れすハうろせへ来
つまても曲なしとや　花鳥と二本の
杦ハ白蕙とせへなくこし不用之
但此説も不越くこし　堅義
私二本此杦ハ旧流のまとりち

大やうよみて然ん
二ことハ文も無きことこんと
哥 はつせ川ふる川のへの哥ありて
いへり 義
私花鳥ノ義強不可用之
いひあてたるに
尼君ハたりふれとのうし
尼君 ふる川の杉ハまとしらち縁とも
すきにし人によそへてそ見るハ

花 尼君ハ此哥也すきにし人ハ小野
尼君のむすめの事といへり
秘 手習君誰ともわきまへうすねと
くにてむとし
義 手習ハ身のうへに志ち縁とも尼君
いにしのむすめによそへて見ん
可とし
あとうすらいへと
義 何しる事なれとも也

私箏手跡く

このひてといふは

秘
浦風へくこなさひまうるゐしとし

かねの尾花集

箋
花集ハ尾よりかつきるくそうひとるよ

こくなるく

まきりしくてこなくひさり

まるの心詞よのりしくハ尾君し

中将の流なきなり

尾君のしとの中将し

かゝしこまりてもすくあさせ流る子

秘
かね尾の詞なり

箋
かねの尾花集すきうひよろり

いとかやしくてそれありしきとの

かく字

茎のしたよりてかきしうしせ

秘
まる君ハ詞し

まくの詞ようはなさりし流し

つましくなるはといふ昔もあや
しかりけるかそてさやしの事
さくこそゆるされしいとかう
おもしろき御事どもおもひ出れ
けるすとありそのたとけまさ
これとおもひてせんせさ給ひそて
つかさるに

花
姫君小路の尼と碁をうち給ひ
姫君すせ花をさ給ふりしかまけ

みしれまとなとしうちみ
いとこよみまれたし
浮舟いお姫の尼よりもまのみに
つまさや
みてなとして

守直

尼らくとかうせ給はん

篤
碁のおもひすのうちて
あのれ碁そいとつよかりし

篤
尼君れ碁のよ

僧都の君

これも碁のよかりし

こせいたところにすりて

碁聖大徳　肥前掾橘良利法名寛蓮

子囲碁好事也云々　備前掾橘良利

肥前国藤津郡大村人也出家

名寛蓮為亭子院殿上法師

寛平法皇山ふみしたまふ時御

ともしけるよし大和物語

のせ侍り碁の上手なるによりて

碁聖とよはれり延喜十三年五月

三日奉勅作碁式献之云々

抱朴子曰囲碁者世謂之碁聖

故厳子卿馬綏明有碁之名

也

或書曰唐堯碁教其子丹朱

一説曰不然其出於戦国之時

云々　以上花鳥余情

橘良利事　抄にみえたり

此文はまた中将けしうし

箋 僧都の詞此基は尼君をさして

いふ

さきせいが基は

箋 僧都をさしていふなり浮舟の

基をうかてゝし

此ゐは僧都すんなる川

又は僧と尼とうちあひて僧都

乃ふる川中将け給ひし事とい

給ふなり

此とうしわすれびさい

秘 尼君の君にそなふなり

むつかし事なりとかてける

箋 基とみゆらんといふべきと也

ふなり

とかくくされくしく

かね尼の詞なるへし

むまきみすわらん　玷

（河）毛詩曰白珪之玷尚可磨也

玷タマノキズ　明月之珠不能無瑕

（拾）此玉のきずかれやすからんとし

（箋）河ノ説に及びがたし　玉のきずと

なるべし

おもひいる事ありて

（拾）宿をたちいでてながめしを

心なむあられし

（良暹）あまねく秋の夕となることをむ

なげゝり宿をたちいでゝ

（秘）何事も分別せざれば身をわすれども

なきや

（拾）早下のなし秋乃夕をもながむる

ねんされどもされどもさしたる

かなしきことはなけれども秘れ

宿のさびしさそ秋の夕をとし

なし

ともかくもありつる中将おほしくらう
此事よくよく心へし
おほかたにてこれかうそと
よみ給ふ也
何ともおもはりかも
少将尾張のよそのいふなるへし
帰さしれそもわかれまさる
秘 時秀の感とおほしめせとし
弁 築

志らう事のやうは
おもふ事さくしはつかはされはす
よれなりしとや
おほせねらしといひて　并 女君一所と
筆 まりの人かうし使の人ゆすると
尾君とよみ給もさくり世人集り
のりとてもかなる使乃りとくひ
そして中将のよしなりける
いところとおもりくして

中将のうしろてし

中将 山さくら秋の夜ふかく月わかれきと
ものおもふ人におもひてそし 実
中将の言し 良房君おもふ人
うらみわかれとよそにかくれいつ
とやおもふ人てこそおもひしるなら
こゝろにもなき落葉おもしろき
言し 昇 義
流れもかはらぬひとへき

義 まよおもひわかれ月こそと
海こゝろしきこゆ人かた
義 兄君おもはせねは良房也かくりり
兄言せんくすきとりて
兄良房君 くさものとおもひもあらて色月と
ものおもふてくはこゝろさふ
秘 おもひはまたしかまたまた昇下
しくる我月は行也ころもかへし
かきとや 昇

箋 我身ハ木石のごとくしてあはれあは
れもしらねと人のあはれをしらん
すかたとし
いとあはれと
箋 中将の心なり
いさゝか出すなときこえしことを世にもの
人ことをりすさましてしてのすふ
此人ゝは宰相君とをさしてかくらせ
とらいて中将のうらむと

あいん乃ゆうことよへ給にたり
花 大臣君かうくてひかれたるや
箋 かね乃見奈とらひつゝふみ聞り
ならひくれたるし
うは前よまうあ給なりん
中将の詞
わまりも心もらね人まうもけふ
みさけししかんとやうふくの
たかきの人もうも心とりさま中

ねんいよ細かなり
こゝろうすはきはいうそあれ
義 此くるゝも用意あるへし　委細りて
かゝりねし
まちりこゝろえのふつゝき人の
花 これはあま君此志りのよ人乃
とかくしきさ候かりしと知
瀬りまうして見ちそて守法師
まて多つてのあいたまふ處きれて

中将よふらはし
うれふしましてゐりねられしと
義 女房のさ候し
まひまいらせひは
大尼君さうり
いびきして
義 老人ともなさ候し
ひとりそしてあやしからて
行 獨樂ヒトツハシ　此事未勘

花
秘
此事縁いまた勘得せす可尋
本縁なしとや　師説心はむすめと
みけんとせしへのゆくたかり一
橋のあやうきを見し危ふなかり
ふみとゝかすし　本説なしうつ
されと然るすへり不用之　纂并此
養行の書にみえしうゑはなし但
此段はあやうき東君をすこうり
男をとうまんとくおしへの不意に

命ありて又荒尾やくりわん
とおちつくる然り多くとへなり此
卿は然えわさし
このさとをもよかそあはしつれと
花
よみ見しもの姫君北りくにおもう
そうかのつれし　并
秘
童形見し東君のそうにつれ
て大尾君のすへ行つれと此中将
よみそて又中将のあれすは所へ

行まる御 草

みさけすしむりまても

草 きゝれつれすめと中ねのうち

しはそくゝのらふし

かんなひくしちろり

秘 女将尼集つすとし

志りかさよおかしきく

行 咲溺

大尼君れさ御し

いさらとらいふすみお 行 龍

秘 ますけをなしくるし 草

いさらみますけとらふすし 行

れみのとりもそてさもん

草 こまれとくまてつるすし 甚时れ行

事しもちつさるし

むうしとうおそろしとも

草 むりしとえ中ねの事しおそろしい

世人尼公すとのさ御とらし

忘られしかれこれもおそろし
けるかな
（花）冥途にて鬼ともにせめられん
ましし
（義）我と命をとゞむる拙き罪なりしと
いふは身をとらまつるは悪道へお
ちんと思ひのせてし
（秘）おやとさしきんへの
これならは多君乃一生とらち

八文字もみんさかりすし
平ぬさらにてるのまち
（秘）中君の事し（義）
さゆらすよもひさうさわ
其の事し（義）
文をまうしもあわれと
（秘）白文字わ
（義）白文よ身をとりてそうこえられしろ
とのは梅し

あし海の名となりしは
秘 梅の二種は名もかはりしそへとき
かはりしかし
花 白文寄年ふるもうらんあら
よちち花の小種うさ花よちうさ游
こと游は
華 あへよそ書君の七ひと游んかり
ちし花もちうすささうきし
花 これ菫五称の事し

花 菫の実すゆは白の好文亭て游ゆれ
孫すれまさる花すり
秘 菫や おかしくよ七ひ出家し
華 幕末此果さきかもそ花みてこうり
人乃花もちぬそしてこり 花
あ乃ありうのあり
菫をはされしく実くしく
七ひ出游
中つまし遅てそまうんそうし 比

善[義]なりともまん事ハ多かれとも
もろ〳〵しとし後ニ小罪して
みをつくりし悪時來事せぬは
理し

これ世にはあさましく流さ海と
善[義]の事なり
能なるの人也
よ[義]みなる人なれ人とえる人を剤し
すると

人ひとりによるへきに
心[何]の中に業しるへし霞[彼人]空し
からうして意のなすとえていかに
うまし毎乃流て忠をまし宗
きしあれんハ
折蓋寄す山高れなるへし水
なく数多けハ文をとして毎を
とてもふ今業来乃あくあるう
まし〳〵きうて

葬るゝに引導ありて経巻に代
不用ゝ　但此事をいふなるべし
是も東のおしへなりけれしきた
父母にはなれてさこれはそのつを
の父母死ぬるよりこのかた始く
引導に及びたまはず尊の音をきゝ
て母をさしいでたまふおほくわれをよりあり
佛法をさとくさまは古来の聞に
まのふみとしるし

私祝義ノ義一通ん
とりにてちゝなくも
このきをとりても
あおるによりまそてうちゑさとこゆまたに
あるかたより居るべし　かやうの
人の家の内なる一人ハあるべく候
うちれ
おもくしりとく
養
良かりし郷をすゝむべし

ますりひもいとたつききなく
箏 浩勝ぬれたる人ハつきさしく
うらねし
いとこらなし
箏 合骨ぬさし
倍頼ぞふありさせる人し
小野人ありせんとし
ぬとみしうなは
秘 さらなは人の使りし思

一条ハ流相のけ
箏 女一文なり
夜ハあとの口従女将
箏 少景ハ恩し
ささいの文ハ流しを
箏 明石中宮し
たるやうりしひるに
秘 倍頼の両月みつといつ 箏
たうしくとあひて尺りるし

給てよと

秘 まな鶴君ならし 義

たゝしらくすゝゝて

秘 尼君太后寺へ乃尚ゟたれたし

やし 義

心ちれいとあしくのを

秘 まな鶴君は大尼君ありしやうなれて

いむことうけ侍りし

義 信なきうも戒をうくるはちあり

あやより御ひとへかへし

義 うちねすることを母よませりやとし

まな鶴の心から

かはしくされつ

秘 大尼君領状あるまし 義

かきとてしりき

かしらおろし侍りける日　僧正遍昭

たらちめはかゝれとてしもうは玉の

わか黒髪をなてすやありけん

秘義 川平同し

私かやよ海てさひやらかり

うき事

まろうとしらぬき

秘 同項とは法師の事也し 花義

ゆうきなかうこもり

秘 僧都かたり

義 母は大尼君し

もんこしゆうこもり

秘 尼君と東乃ゆうきともなはへ

し 義

弁 むすめ尼の事

これかれせしく

秘 まち君し

僧都の詞

ちうこうりと偏りて

大尼君の詞

毎ちてとするにいましして

秘 僧都かすり 義

あまやおりしまゝす
僧都の文
ねきりまりて
手習君は候し
ふいそうてまうりきかしも
秘 僧都の消
義 不意しせひけれし
そのこゝすて出て
義 法師すゝの行しとは男をすく

て女の事くみめよりしこし御お
こねよしや
世とそむきさの人かくの
尼君うちの中より手習おし
みくうんすむとくうら
世中に侍りしと
秘 手習君は返事し 義 力を投ん
とせしすし
ましはれとさせ給ける

尼君此殊にてうかしのすゝすと
いへり
まいの人そうりふくも侍らね
女かたちそてハありしとそ大て
ありしと行さきとをけるは
秘
僧都の詞 箋
さひしくてんとおもし給ひしは何
よしおりせと
弄
箋 本巻にもいへり

箋
行さきさきさく人乃後悔
乃ためにいへりて罪ふかし給へ
しとゝ
いとさひしくしきねさすん
箋
女乃様ハよしく未のとそうお心
えり退てこそてこそ給へん
あさうす侍しもり
秘
まかる君の返事
箋
やとり木の巻しや毎のまかると

尼よやうさましきれならひし
ませおりしん
なしうくりとのやしくちく
ま習君れ法とすくすくんかそ
こきよし
あやしくかはかくさち
秘
僧都の在中なり
秘
地乃章もさてそいふなりしう
以前都し時の事し　并

義
光いすくうりやとのこ縁ひ縁し
とはおよ心客本ん
あしきおのこつけこかるは
義
霊の事なり
こかしのいとうしろく
義
おれ書のうくとむすはそても又ん
よりあこりての徒ともありしき
事しりいわりに出家乃んさし
とは之實のかあのふ事しる

是は法師の身にてさくやうゑ
こと承りすると僧都の
詞し
わいむとへいとやすし
秘 さしより僧都の詞し
私とまれうく海造とりより
僧都の詞とこゝ也
ここうきつわりて
秘 云舗まて急ぎのりまうれけると

義 一　平家の比叡のけ所し
まうさんまうつうしまうらん
海道の時御裳ぐさせやさんと
かうれいひとさまをけさんと
自智君の御中し　さ月すさはやの
尼君還向の為し　也なりう
尼君よりせ下向なりは
御参をはまこまへんかておりひこそ
又智の御ゑくし

みつからゆらみあしうりしかれとに
秘
覚ゆりやうそとらふさて心の
うらしゆらつらしうつ梅ゆくる
しらるおそてみくさわて心まん
なしらるし
いとあしく切れたし
秘
覚ゆり手習れ詞し
ひしつまんよらよしくあしく
僧都乃心

東やうけねん
秘
おりしろつさう紀さ風うち
うらやすさて内(ウチ)ゆきらん
筆
休息して乗内せんとし
いとうましく齢ね
手習君の心
てさことりてくしみさとのふさ
いく大ことまち

秘 傍輩のまひつきれし
うしめ見つけてしらぬかほする
義 守護院まで手習と見つけし
二人て
けよいましうかし
秘 守護まで見つけしし人かくれ
也 義
うれしく人それ世よおかせん人も
昇 女房のおとらまで世よ一緒人も

まつかしとし
木下みさひつ乃わて涼ひよ
て
義 髪とも木下こしつりきさむ
とつ見ゆ
ささゝとまてまつひろつ
義 はさゝうわ家し
おねの尾い世こまの泪まつ
秘 傍輩のつれ行人とあひし

うへし

（養）少将尼康業つうかせい兄弟よはん人
うかとあひしらひてよ習
君の御歌とをしつねし
かく菊事すんと
このさきが少将尼よ去ぬし
まとひてこそみるり
少将尼すり
まうれく人のさね（さきさ）けさみせ

（秘）備部の衣みり（養）
（弁）備部し衣裳衣や（ささ）
おやのれうさおりもしてきりつをうを母
つれ
父母のうさと拘すばれあわ
川うるもをうね
（秘）柳うり
（養）母のありけるさしわつれうのさ海し
元母ひあへ給ひてたりま給ひけり

箏 まことに君ハなさけあれど
あさましや
秘 ゆめのよのうし
あふさき事ハ
奥ゆかし 是悪のいさめたに
うへりおりしては
箏 尼こそいさかひ
なてんこそひ中
河 流轉三界中恩愛不能断弃
恩入無爲眞實報恩者
秘 流し 箏
またさてしおと
花 恩愛のとりて
秘 恩愛不能断とりふとさて
我身ハおやのためともおもひす
てし身とこそ
弁 たもあれし
親のうけたる身をさらせり

捨るは不孝し これとても世には
いつれ又恩愛の報恩をかなへす
親の行末親類をもたつねかれ
は恩愛はなからへてゆく身の
仏事とし

ひとへは僧都さまを給
受戒師の給ふとし
うけたまはりてや流し給ふへくる
給ふと

秘 僧都乃出家の功徳を説給ふ
や 箋
箋 後悔すまきやふと出家乃後と
おもしろし
ともよせさすへくもあらす
秘 手習君の仏事
箋 尼君たちまての手習乃出家の
事をとらへさ給けしきにと
当年のあるまじきことはりのう

ましまさし
これのミそいけり　仏出家しありて
然仏乃利生ハこれのミ成就
しかるとし
身をたすけうちましかば出家
の功徳ハかずかぎりなかりしかり
身をたすけ猶しかるかひハ一日
一夜の出家の功徳をとくさけれバ
とかまりしくせつよまの心

さてそ仏とくのミしりはうたかひな
かりし身をありひろくこれのミ
とけり
尋さてつくりて世をまかりね
偏非ふるさとや出家しけるかる
侶し
たりそミ流す涙みな世をしのびそ
皆くの事若しらず翁みかり
老をとろへる人

くれくとさくとつて
とおさりせとひきつきそ
築 付て文字清濁音等より継清く
よむへし
みとうしとかんか半し
秘 良寄の名し
世ゝ文字読ては
現世の事成りり雁ねよし
也 良寄の名し

はとおていかさすりに人乃ゆるさね
本
築 良寄の名より
おもとれるなるへし
髪のするそれろうりうしくそそれ
しるとも云
花 くろう云すしておりん
おくふくしへしてしくつり
そんねんし 築

くゝとちらつかみ
くゝとちらそてつくしておこれ
ふるし
うれしくもりつくさへ
右中に出来とらくといへん
くるなさとし
見すうひとのこゝけさ事と
見るとらつすと書うゟこめや
つけさうすとらし聴のすへとや

うさおりし身ともへとしありひて
まてみし世をそさしみすてつる
見る君の一ちや身をもへさる
うさおよらひすてうるとし
あよ身を捨つる事し
私身をもへともい見るの我
身をまつるうありよさへく
をもらひまてしれるへ
かさりつるそうしと

入道君
かゝりさせてといひならはし世中を
うつくしもそむきさりかねけれ
箋
是も同しなるへし
异
此百首同人とよしあつかひ今そ
うきよりのあかれしくねありまゝく
しまれし紐みも同しまちの
よみたときまゐりむあつれやし
秘
おすしものことを
同人すはへ一首し

箋
紐のかりまとかりて同心を
とかや是ハ一首の本歌の分別なり
ぬへきまし字乃一字二字ちう
ひそもんのかりまるハ本歌となる
られ是ハ紐かゝりても同んし
かうる事ゆくとらひそゑかり
秘
らひやりまゝし
箋
中ねのすへきよ尾ゝりまゝり
よる事もとなし

さひしさをさしみかかり
（筆）中将の仰り今さひあはせまするや
ましうにみせまと
中将の女将尼みとにうつらし
まうく
まちかかり
（筆）やうて中将の使わるし
きこえんうとすさい
（秘）文乃絹まり

（中将）きしくこころあんしてあるを世に
のうとくれしとらそうさしさ
（秘）此世の床れんし　弁
私下るハ中将も数んのそてき
くうきとうや
まいるうしをとつきのゝよ
（弁）尼ようりの人ハ中将のみともて
しあてミのふうりあのあわれ
るるおとりや尼乃身なれは

なかしうて返事をとおもへと
みかり
あはれてうき世にしとおもへれと
紀にも忘れねわすのうき木をと
うき木は舟し世とすてゝうる
此岸下してあし世とはすそ
これとは乾さきわすしとし
舞うき木は舟し
心ゝらかは荒きくくるゝ浪れとも

月は波のり舟とよろこひあなさとらへ
をと雨らの舟は出ゐらふすゝ
てうひふしの人あなと
よあとうけなはあし
うきうやしてゝにそ
良房君の詞
あさそこすひ
大將尼すくのふみ
紀つくしきそもらふふるゝ

秘 中ねのなかり
あまりての人
箋 尼君やうりせよりて下向し
かしこ男そていましめさうらへてそ
秘 尼君の詞
御歌をとてすゝめん事なれとも
うつくさ男をいゝしとし
ことふみなれとむとうらこれに
尼君此所来なりしうき事をとりふて

ふしまうひて
尼君のうけくさ海なり
海とのおやのやそてうしもつきあれと
秘 右あはれなり
箋 此尼の尼よなりゝると尼のうけく
よつけて此尼の所来なくなり
し時実母乃うけきつる海
をとまりおもひそくかなしきとし
此尼のなれし

いとおろかなるこそ
尼君の御し
山ちかきさかひに
（行）小袖　袈裟袈
なかくても
此小袖よりなかくこそや
かのそしのびしもきこえく
（義）僧都かくて法讃ありしかと
弟子ものゝびしことかゝらふ

みかり
つよくいかならぬ紀ありし
（秘）東の内より　僧都讃とありし
かくかう
みさかりのへさせ
（義）御後法と又七日ものゝ経させ
のうへし
よろにさふかきせのふ
（行）東居　二間東居し

私一条家の東殿よりさかつ様と
さかつひごしらは
国や是よくさひまうさ
おもし御様におもしまして
秘 中宮と一条家とし 箏
并 中宮の女一条家とおもし様に
おもしまする又云備前めし
て同し宮家の御様なるへし
むかしよりまうのませのよ中なる

秘 中宮の御詞し
世中よ久しく侍りましさ
秘 備前の詞し 箏
こしらひ給ん
箏 今年末年し備前より 紙合
よる詞し
御あれけの出よ給ふさ
箏 明ふ中宮の御詞
いとあやしくけしの事

希有事 秘

僧都の詞

かの見つけたりし事

僧都浮舟を見つけたりし時乃

事をかたるとのたまへる

小君見つけたりし事此君

姉りかくしはちてよかくす

物し

おとろかさせ給

中宮の寝入給へるをとおもへし

のへ給し

大将のこゝろひ御宰相の君

うちとけて物かたりしまへし

薫君ひとへと前よみえしかは

あらさせの人々おほしき

中宮の御氣色をとりしと僧都の

せひてくりしてやさねとふう

その女人 秘 女人

とのに給つる事あらば
僧都の母や妹とかや
北家（ほつけ）の后さしつきよし
手習君の尼になりし事
まにしらりと薫大将のめ
僧都の妹乃尼ハ事なし系図よ
なし
うせにしとんすて
中将のよしハ尼君の婿

かくすゝみたれなと
手習君尼になる事
との宰相君そうふ
（筆）ちとせひ合する所にあつまりに
て此宰相君のよしとつゞ
して薫にまつる人の家
さるにやとらひ給へ
（秘）僧都の詞　宰相か詞をかくさ
さうまかくとらひしつりさも

やまかんとあくのうたし　并
ゆかさ海しらぬ
秘
こされなて田舎人の中よりもまさ
人なること
京の中よりもけむまれなれ
まてそ
河
龍女成佛の事し　花
義
龍女成仏の事し悟性きも行なも
ようねとらそし女文の本前なれ

猶更よ女人成佛の事を云文を
習君も女人すれさや
つきかうさき海の人
秘
君辱の人端止する人ハりきは海し
とし
義
出人はまれても女なるうしか
らぬ戒行不具足なる人し
賎しき人もからそれは
又それ戒行あるなる人しとあ

そのほかのならひには
秘 浮舟の事をすゝむべしと中宮の
ことはりのたまひし 箋
あかしおはするにも
花 宰相君をとふらふべし 評
あの君のつとめなり
秘 二条院よりのつまへし 大君も宇
治そうせのまへいさゝめかくも
みへしとし

評 中君色よりうとしとなり 小宰
相も婦人
箋 あの君は浮舟君の婦中君をと
いふべし
私云此之義一変をとすれば案ずるに
秘ノ義に至ては八宮乃孫のお
ちうずて大君のうせし
事を甚歎して浮舟をまう
けさせしと云くすゝむとなり

しかれ御前此人とは必ず宰相
に跟なくかるし又ある君は
中君とさしてをとられて
こそゆかるといへりし小宰
相ゆかりけるん又は小宰相の帰
君二条院のことはさらに梅たり
あるんなお枕て出之
よしもあらぬかきしらずかるへも
あるやしる

苑
かきのやうなるへし
秘
自然ことさらぬしる事にて
箋
やと俗歌もくしきて
浮舟のことの外思ふゆへありかき
事ありしはへやあながち俗
歌のさひてよくもあるなきね
とし
弁
海士の怨歎にもあへるへうし
ようすさふへまさの事な

宮へ
宮はこれにもしてこそ有けれ
義 明石中宮也　弁　中宮の御乳母
弁のおもとなとはしかりけれはなし
あの人々その後はこれと
秘 小宰相也 義
そうしける人は
薫は後し明石中宮の御兄也
小宰相はいつまても参りしは

その後はねし
ひめ君をとらうさ
義 女一宮也けりのけ本後した
まゐらし
かしこまりのまいれて
義 小野へ僧都のもとの人々也
いふしくなりて
尼これ僧都をとうらかみ
乃後ひもすかせきて

花はかつらゐへとまちて後会
わかれさきにことし
いまつくはなをとゝひと
まゐる人猪頭の色子絶
ちれさきおりとかりしるも
秘 ますよ三治そまかへとおりひ
しゆ身みれいまさおりおりひ
すしのふもとりうとし
いとへしくまんおりけり

弁 昔君の世はとりうとさひと
つまのすくりとらふもさひりく
さひのゆ花ちやさし
私ぬのけりとうれみとし
こゝろありさ海とくしとさひとう
絵人あそらふも浮舟乃色りいは
ちりしさそらもて
世かりふしあつうしをし絵人
とく

義 竜りく 是海底の事也
借錦の詞よみ君に出家の奥に
事也
あやうしとおもひねかふて
秘 借錦に花布錦よとありかへるを人家ありな
ふかし
義 女一二あまたの紙布錦也
みかしらもしかんかきりは往かう
まうでん

借錦の手向とおもへらんとも
世間(せけん)の草花に錦かるひまわりて
義 世上の草花の色々れる花をと
いひたるなり
この世ありのちは葉に咲やすく
ましと
何 陵園妾──ゝ 顔色ハ如花命ハ
如葉〳〵 薄奈何 白氏文集
陵園妾顔色如花命如葉とて

君恩の露といふ事にいへるなと云事
のうきにあらしてしらぬ人めも
陵園妾にいへるは命は葉のすゑ
うつしとは君恩の露といふ事
をとりてあはれは常のあはれなる
によそへたるもとりあつかひたる
事なん
私凡陵園妾といへはいりぬへし
まれは帝皇崩御ありの時の陵

此女さりうに宮にくはへし宮
女をしてまもらしむるなと
いふ也　松門白氏文集に勘之
松門（シヤウモン）に暁（アカツキ）いたりて月に徘徊（ハイクワイ）すと
松門暁到月徘徊　白氏文集
陵園妾の陵をまもりてあるなり
此まゐる君のまつりのよしなすると
松門は松の木共ありてすの門
なるへし

昇

纎細とらは月の光しらなし陵園は
宮女なりし君恩にもあはずし
て終に陵園の妾となりて此處
よる人なり王昭君の小野もあり
すまゐのなに細くてつ
されは王昭君のうちにけるうちして
かゝるの尼の中にぬ終ふは陵園
妾に似るとし
ちよやみえもしひきうせ

王昭君の名し名にうちたる家
借額の白をとむらし
言ふはいひけりとよみて風
柏城終日風蕭瑟 白氏文集
私語つてこれる句し
山寺しいか終日そ
山路の雨はふけしきし山風とも
行らもちよまりきとまたかぬて
急人かしとしこれも 柏陰

終日風葉緑のうへに此晩悪皆
陵園妾の心をうたへり　栄昇
栄 柏城は柏樹のおほかりける所
一
昇 生前うとくすして給はぬをあらたね
心なり
これも今は山ふかしと云
秘 年月へて心なり給ひしとふ所詞よ
て僧正はさやうに出家の心なりけれ

ちかき世に一
そのなにきこえたる人は
栄 僧正のは歌のさまはえたれとも
うたのさまはえたれとも
秘 うしのみさまは立にてかれて
うしのさまはえたれともまことすくなし
私云謌の方し
昇 僧正はさやうにねとかれも
さりとれ第一なりけるかりそね
そのことをのよ

夢浮橋巻よ岩ハ野といへり
甚意同し
こちらのみちより
叡ハ東坂本横川への道
くろたにといふところ
河 黒谷叡山にアリ
義 叡山より五ケ所別所となり
黒谷もその一所
私是ハ山門より隠遁乃所也

うらなき事もいはんとて
年ころ君物語の事とし
みれハいとあはれにて
義 紅葉なり
花よりけなるもんと
秘 おもひうたなる人ありてハ通もある
ましけれ君ハやすからん
うつてハとや
いとあはれにてつきしらぬ

秘
中将の詞なり　義
立よりて膝もし侍べき
義
紅葉をとるとや
私昔舞をてあそびし時の尾り
よ膝よもしつゝさとらふれ
をと立よりとさへ　義此華と
花鳥
木枯の吹にし山のみねよりはいちら
しらべへき陰もよそにたゆまき
秘
琴の音も古雨をとふれたれは

とかめぬとし
義
琴の音の物哀れ事し
私木枯の吹あはしは尼君は実
の女をとらせあはし事立よりて侍
陰もたえずしといふ琴の音の物哀れ
かすをとらんたんめり
返中将
まつ人もあらしといふ山さとは
木末をとへれて起こりきぬ
義
なてにまつ人のたきなかけり

うきとし
いふひゐきくの
繁 ゑみる丸事し
されとうにちゝきわし せあしよ
繁 夕ねの花丸をひらんとらひし
事なり
うそふひ文のおや
繁 うそ墨文し
私ゑみる丸出さらし

すゝ山文とうそて
繁 くすゝ山文丸たし
うみいわ い扇を
河 色扇よ有五字三字ゝ
桜丸三字うきのすとかくしたらひし
花 さけ花の紫丸かさしくわし
しらは扇をとひうけかるし
秘 紫のそうれてすそ乃ひらくり
よそとらふし

弁 みしかき髪は縁せしかは
義 檜扇をとりてやかて絶しもとめ
　その筆をかるし
給はんとされて
義 まみかのさ海みつ
うち見れはとに
少将見れはすり
心うけ給りん男
中将の心を察するし

うけ給りのりにあさくろあるみ
義 ふしまれ完ん
いとゝ六くれてそ
義 中将のまなことゝしみてあさる
　ささるるし
ころしてもんあやまちのやしよ
義 まなこと中将のそうしくは
事をこつのあやまちのやし
は後悔するし

けふひもこえしぬ色なれと

(秘)中将の事也

中将の元よりのことにて侍へるも

あくねさ海のきこしね侍しと

まて立のさしはし

ゐつるねへありけんや

これなりとかくらうさへとりし

うすひらへのうつねはいうと

也けり

そのへのへれむすめ

これなりとれかくらしけれへのせ

うらはかゝのなへこの事なりは

まと象へ小也より中将の侍なり

かくてひとりてん

(業)侍なりともむろひさりけしく

中将のうくひとへんと也けし

よつるのさ海よれあはしそしかれ

体も

秘　中将ハ詞なり

箋　風流なきのむつひハあるましく
かりそめの事もなくし尼に
うつりしハ大かたのむかしかたり
いくらしかりぬ事なれハさるよ
そしハましのいそし　尼君ハ
中将のうち詞
ましうされたれたく

秘　故姫君のうへを思ひいてゝなとし

又ハ海ひとつ

秘　中将のやうなる人もむかひなきこと
いと珍しくなりぬく

秘　尼君ハ詞なるはかなき事を云殊
見るめのなくもなき尼君ハ
まめのうしかくなん事をおもふ
くちをして
あはれなるかなしひかへさせたまひ
けり

花さへみさ陶し

あ花さへもちられねへすさへし

中将のさふ乃し此姫君も花君と

なさるへねへすゆへしとかし

しゆ事と中将のあやしく

さふし 叢

中将のたよさふし

ゆ末の流しろとい

中将の詞

いのちもさりうへ

中将の命此事し

身のうきこしみ人なさへなは

身あるとへ川めへさへなはみさくされ

中将の鈴哉し

さかゆへさ事ふれ将り哉さ

夫さのむすひちうりとらむし

ねすみれい易ねるへありとても

くゆし わつへねすみれそらふさ

人はいふなへきを悔りて世かり
一結り
（秘）尼の詞なり
尋常ハ女のうちうちにありて
おもせはるもりぬる人もあるへし
うらゝかり執家し給へいさゝめ
みもあしし又くあしうう悲
半とらふ花し
佛ハかくなりとよ

（秘）後世の事のことゝ云ふなと悔し
こゝろさもせうそこしのたり
（蓁）中将の多るつゝもせうそこあるなりや
（中将）おもひこの世とさもしきける君かれと
いとゝなよせて見てそつれ
（秘）中将の前にもしハ執身とハせ
ひのすみゆくりうくそしくあ給
うとむへハ執身もうしかしこ
とし（蓁）

私無御座世をいとひのかけ候とも
やかしくれさる中将をいとひのかゝ
まやと申はね男さへつゝきと
同候かれと得さ

給んころよふつくさこし給とみれ
此世にさ八使の中将乃息ちる
さ御をとりて御すまをとらし
ろさんすとをそへて御事ちる
候へし

さらめとおかりしませ
親中将のいる御調をと使のいして
候ふへくらん此物ありうすと
息子の大ことよのゆゑかまいらし 候
あさ男とりて
いとなつけるらしくへ
中将の弁の大事乃事もり
くそたりあるなし
さひとりをあさましき

秘
ふ習君の心より
私自家の意より思ひより
のたまひし事也
くちきのやうにて
河 形ハ固ニ可使如槁木
左 かたちこそ深山かくれの朽木なれ
秘 死灰槁木のことくなるへし
とし 箋
箋 死灰ハ火の消たる灰也 槁木ハ

朽たる木也
しをられおもとの心しなから
しも
箋 物感せさるとし経はいまこと身
をとおそくまろのおもひしら
尽よなりては心の空なりて心も
それしくさとし
言ふて婦りつゝ
箋 小野ハ浮舟物語りしも言ふるゝ

よしさとも霜かゝりしえの山花
ふりつもれとも雪にかくれし
ゆきとかり

（松花）
けふもいはふさゝみうけり
白雲のかゝりてつゝける峰は
行人きくやあはれひとまちん
此まゝにても見えぬらん

（秘）
年もむかへつね
菫丸七歳なかり　筆

あれ菖せぬさくらかりてく
（筆）
宇治はこかりゆね川菖やうこれにに
見て氷の菖乃せぬもゆひし
ことくし

私小野の山川すゝれ菖きひ
しきあふしえとかりて菖れ
せねゝゆひしきとふかく
ゆす

君よそ海とへとものあひし

秘
白は去年乃春は事し
業
白の年花の雪けはあるそ
花まそ海とふ后はやつれ乃
年は中河
良寿君
かさくれ野山の雪となりても
しかしとそ言ふなるへき
秘
落るむありしうし
業
小野の梅し
業
言ふもなるしきとは百年ま

あくもきふもかるしきと
いふ后ありて百歳乃大定くハ
いと海あれや桜かさしてふ
もくしいはゝふもはなかり
まいのなしきあれてするひ
りるなつかん
これ世しるしてそし遠くして
ゐるかなと
業
これハ浮世の一周忌の仏事と

薫は人の事をと人のおもふこと
ことすゝめるとかんとて乃
席也時毎にも去年之月乃
事なれはうくいら
ものいはん人もあるまんしをむ
出かけも雨あけ
（匂）白薫母すこしは事あるへし
わか菜ともにとるそれなこそし
へく

（薫）殊ならは縁やそはしすは忘みつ
（宇治）実方部か根の縁うしろ菜をと
いれて円融院よりしてまつは
とあり
（尼君）山里は宮君のこゝろ乳つゝきや
（秘）枕おひさ嫁の東れまはかれ
姫君をと親しうこと
おもふくまてまつれ
（薫）尼君はまゐる君へこゝろ菜をとこと

くはし
延喜帝君
武かさ野 いのちをも今はわかれ
君ゝかゝあきらとしもつみ人ゝ
秘
民君はゝあゆらみゆし
義
若菜つむ身は臣は君と親し
子は親と親しく学ぶとのこゝん
とゝくつむ身し此まわる君は
民はのあまは親せん人ゝすしとや
まて君のすゝんと

高子の后ゝさそはるゝと臣
君の家して其実あられけり
ゆふし
みやひある人ゝさ
高子の御家し給ひれりとせよ
春や昔れとあと花よりも
伊勢
月やあらぬ春や昔の春ならね
我身ひとつはもとの身にして
義
引歌曰

あかきりし白菊の

（後）おかさかし君か白菊は菊なれと

梅花をそけさかおりつゝか奥平郷

（和）白きも薫そよせ

（昇）白菊にまかふ乃色ともなしゆく

すやとし

（重）と花よりも梅の香れ匂ふまし

こゝは薫るにせめしこゝろ

ゆくとまかふのこゝろもせん

尽とや

こゝよ尚りてまつゝせ給

（和）後夜や

後夜の鐘とまひよ閼伽をなはなかり

まかし

（重）閼伽そまいる花四六折り六

たゝと哀するし時節の花を捨

うりくいてまてまいるとれ時

花ともかし

多分君
さてかましく〳〵てきゝ尽しね花の事の
我れとも此ふ書れ明かの
葉なる〳〵又白ともなく
此尼君のまこれ紀伊守
箋
系図に見しね〳〵
何事かとぞおもし
秘
一任の間ふとし　箋
去年　去々年し
かけ〳〵しきさまし　紀

秘
大尼君かけてかひなしとし
このことに来て
秘
尼君し
弁
大尼君かけてかひなきれい女乃
尼の方へ来るし
こまかしてひかと絶えれ
紀伊守か大尼公の事を云詞し
折りかさ流さ海を
大尼の餘命いく〳〵もあらねと

任國に移へりてのちてのぼりけり
みなそてまつりね事なき
あやしうおもしろがりね
紀伊守父母のきさするへし
一ところとこそ流かりよ
箋 大臣なとにて
ひとつれ北の方は
花 常陸の北方は浮舟の君の母也
これは紀伊守か妹なるへし

秘 花鳥說浮舟の母の北の方ありといふ
これは當時の常陸守なるへ
し　箋
弄 浮舟君のまゝ父乃常陸なれ
あるも又常陸にくたりける人
乃北方なるへし　紀伊守か妹也
とし月ふるへては
秘 尼君の親し　昔語ものなつかし
元まかりけり給まゝしき

似
大臣君ことの外老耄もあるへし
并
常陸少将と大臣の給つけ侍へし
とも　義
私に常陸は国よりあるにて
えしらり
さうあやれ給と
秘
まゐるのへし
常陸の少将とみゆり再
と侍るへし

みしふやう海うりのかりて日ころよ
国よりのかりてハ日ころくわれと
大かけ事もけしてころく筆は
年のとこえかりける事をも紀
侍るうへし
中川一ところハ一てこせうせ給ひしき
是ハ今治の大君し
それ北おもしと
申る君し

ちそれ甚くも世話にそれは
浮舟の事なし
その後こそれなき
因云の事なるへし
るにうしもうの女乃所にて
紀伊守ところ云給し女乃装束なれ
法事の時布施物の料し
一くるまてたし
一領調するし受取て御持する也し

此紀伊守も薫乃衆人なるへし
せまほしてんや
花薫あつくにくはん
秘 よろすへきか
織色きれなり
いそてうあうれなるきるん
秘 まかつのにきり
あつよむうとして
篝 まかつれさ滅し

ひしきのみそ乃ねむすめいらるゝと
と
秘 八文字あり
おりて文字乃かのうさハ
中君の事
この大路我の流のち乃いかあらりそこり
すゝへし
箋 海毎の事別腹とらよ
いらしくるしひ

草の事とらせて
ちしめのこさいらしうりさ
弁 宇治の前の君の事と云 箋
れそくすけりし紀川へつ乃
秘 書家もしのえるうしとし
弁 草の事し前の君の事とすけさ
結し事し 箋
みちるものさうしさく
秘 なる事の伝あり

義
薫ハ紀伊守なりさくし事ハへかるゝを
むつかしくおそろしくさうとし
あやしくやうのあと
河
同横ハあとらふかし　秘義
花
やうのあとらふ的上の巻りも
あまさ河りあやしく尾りの
あれしく　あやしきさ海のあと
いふなさり横の事とはさ海とし
いふさり

私河ノ義よしし守治りて
の薫乃さ海とかくるとし
あしこそしもよ世治ける事
大君も浮舟も守治りしてうせ
治とやうのあとらふし
いみしくあさ治さ
秘
薫の浮舟を意志さひあまとし
うくのおり治てとしらしうき
つけ治し

弄 川乃色より夜のうへよのありけし

孟 かくしつは氣もと泊りねあれはへり
落ちゐ深いてせさきあへと

箋 准母の身をとすけし給り後之
しそよまゐへり
去て辛しきにはいとあはれなる

箋 薨乃き始をとりて
女はいらしくめてもそてまうりなく

是は無別 世間の女をとらふ
ろう給し時よりいつはあれはと

秘 我身はとうりきさ薨とものきこえて
まうるとし

弄 紀伊守ら紹し
世中の一(イチ)乃所(トコロ)も

秘 摂政関白をとうう 弄 箋

河 左大臣一上と一乃所とたん或一の
くろうふし又執柄家一座宣

故将一人又謂一所
と乃殿とよめることし
袋 萬葉乃事し
ともふるき人となけるは
秘 萬葉の人なり
袋 私ふるき人となけるはわれは
紀伊国と萬葉の云人也
光君とささえもん故院の流なり
さ波

光源氏故六条院し
其の流ぞかしぞ
袋 光源氏よりれ後の人とも此御子孫
なりていへのかてしてまいる家
もなしとし
右の大いものとれのみてし
花 右大臣と此歳といへまてとらん
詞し あるくの事より此君とし
わか同詞つくひし

善と悪とはいづれかと云詞
也并義
これはあくらもいとうなるしきさ
よろふこゝろをくくりて
有徳
又悪の事をといふ有徳ハ初嫁正
しく熊あるへしひしはんへと
いふ
それ人あるもんやうは

悪の名りある事をとゝへ
ていふれやうなるとし悪の常
てれなかし
何これもあしくも
悪の名し
身のうへもこの世のことくもあれし身
我身の上乃事をと案所中り
うきみをとゞて悪乃名り
此世の事ともさつれねし

忘れ給ふなよとこそいはれて
秘 手習は九つより 挙
挙 昔は忘れ給ふなとせて
いとこし君の名なから
昔の浮舟と忘れかくしのまなと
見て毎の思ひの深きらんと云
婿し
いふひすさき海とみてしきこそへて
まつらんは

挙 出家は去海と昔つ六ちまし と
かの人乃ちひ法けし事すとそあ
いそく
紀伊守は云ひつけし浮舟は同
忌の法事は布施あのきぬを
いそくし
うれくしきひ給へせ給へて
花 きぬひとくの見しとひねらすし
うちそておかりゆれは

手習のとふらひの料乃きぬを
まゐらせし
尼君にいひし事もらすまて
手習のなにかしといふ法を尼
君にはきぬのそこさへそれて
さしあつかふし
くれなゐに桜のをりもの
布綾の料のきぬの衣なれは
色し

此まへはかはをとこそ
手習をとめて
あま衣かはれる身にやありし世の
かたみに袖をかけてしのはん
かは装束をとめて昔を思ひいつる
やうにのはいかてるゝも我身の
周忌の供養乃料なれとも昔
を思ひいてゝいとあはれなるとや
手習君の衣はいは尼なりし時成

くはかくはゆくえくとして昔をと
や思ひんとし下乃心し咲秘と
同し
あのかくれなき世のうきれとし
我身のありさまをとりこしうすと
しておまりあかしうきとさふ
色さうやとのなるの心と
色みしかさの事いまえてこれ
須らしさと

ちくうそいさしかなのかりしなし
なうすは事なりしらくりり
つけて
然るねなきとする事よつけてや
之義あり案くなるのまて文よ
受領うれいなしの料乃きね
なと綱をすくさや　いのかなしり
事よつきて御やさいなうはと
まし文のあくらみ事をとあのわ

うけたる詞なるへし
何とおもひし出家の事は

秘　尼君の詞

よのつねの人ならは
尼君こそあれしよのつねの女なれ
何とてかく人ならはいふなれとし
むかしは弟子なりしかは
秘　我もともにとらへり　花鳥
さる所をいひ出家をねかふ人

秘　良君の母をとらへり
かれはよしなくして
尼公の女は眼前にてはかなくなりし
人なり
猶このよはなれん
弄　母のさとにもてなしかなしさ人をと
さくらへもてし
弄　来世の生処をとふらひうるなた
さとし

ゆく末とてもひさし
浮舟ハ行末すくなかるへき人な
くなれハいまくてあるひまけ
くらんとし
君しりてこそハひとりハ物し
給さ
花 浮舟君の母北事也箋
秘 浮舟母北訓箋
ちひろかりつけて

ちひ出家もうちそへれハ出家と
蘭名そいふしとし
大将ハこのそてのゝなさすれ
花 浮舟君の一周忌也とあつひと
しのふわすし箋
秘 三月の末なり
かつかしし給ハ蔵人（クラウト）なみし
花 元服しけるとて
拝 元服の事し爵ありけます

秘
大略叙爵をかうふりといへはし
されどこゝは元服の事也　六位
蔵人とみえたり
私常陸介か子どもの事也
かれはつかさのぞみふかし
河
右近将監也　薫大将殿也
義
ぞうは将監也
かうはすゝか中に義もけうする
義
夢浮橋の巻に　薫のみかりにて

来りし童也
西すとかゝりて去かやまる東
秘
四月なり
きさいの宮へまゐりのかう
薫は明石中宮へ参れる也
あやしきさとよ
薫は浮舟かくし　宇治乃事也
人乃そしてさ給しも
宇治よりへ細くおはするはゆゑく

しき事とし
それも人のすゝむこの事は
秘
歌の巻りも守治すべし心得り
能すれは自然すうす出能しや
我人のらしく事まれ後もあやま
うとし
前乃ゆがしや
花
ゆがは悪の字し　蓮
秘
大君浮舟のうせみし　ゆくゑうり

前後守治は道心ともしへ人かり
所すうとし
弁
前の冷らせて守治家乃心うさき
身まゐれりとありひ行ひし
とうり
さしりころ地乃舟ありりは
ゆけイブコロ
逝曽一帖りりはさきし　万葉る
和しいの乞い浮とあり
秘
浮舟九国ゑし　弁

たゝうき世のありさまおもひつゝけらる

箋
大君也浮舟也事をおもひて
のゝかて

御心おとさすへくもあらさりける
いとつらのすまゐ

秘
こゝろしつまれすさう

弄
八宮の道心ありすましゝゆへ
ことおもひのあまり
かの事おほしめして

秘
僧都の申せし事也
箋

私明石中宮の御心なり
さこよりおもてうしろめたきやまさりなん

秘
中宮御消息也
宇治の様なり
むかしつくさしはとをしたまうと
大君浮舟の事をいひつゝけらる
ゆくへもしらぬくものはたて　薫也
おもひのまゝなし
箋弄

私中宮ハ本院のかりけるとは
人々（御母）ことさひよりての給ふを藤は
たゝ持ハ共ゟつくさせさせて
思しちりけるとありけるし
也　藤乃侍なり
行ゑ侍らん
藤乃内侍なり
うせ給ふしさ御かなしみハふかくおはや
し

浮舟の行末なくなりしを
いふなり
稚めくしさのふるまひさと
（秘）中宮の御悪あるよしなり
宮の御ことの
（義）白宮の事をかなの義にて
御たなり
くらつまふしさへの人
（義）藤のくまひのふかき又白宮

乃此事につけてもいひかくさ
事と中宮の若して志井て
いの給ひねとや
小宰相に思ひて大将かの人乃
事を

秘
薫のこの人の事を海をと明石中宮の
宰相に思ひに絶ゆかし
その子もあるさるもんなゆく
もし別人のうへにそもあり
てりと若してかさく絶わさ
まれとし

秘
君うをしくこそあらせけら
中宮の小宰相りのかすかなる
をしくよしやりしとそれと
薫に物語りくしと
かさとなるもん事いとかうくし
やかしさやうなる事えらし
てらうとのゆゑて

のこ海の事

(箋) 中宮の小宰相よの給し

おまへにこそつかはせ給ひんかす

(細) 小宰相相君なし

(箋) 中宮をさしてなし

さ海しらむ事なり

(細) 中宮の御詞し

(弄) 白慧さ海しまうしかつねなり

さうらへし

又ませいらせてあしらる事なある

中と

(花) 此人とは白宮もこうすてむひ

給しへすると宮あなうしまし

給て大殿りかなさのまへにつて

もる頼なれて中宮からも出たく

宮し御しるなし小宰相も

尾うてさなえなくおうしとむひ

よりし

秘 白文は此事あれならむと於し
くるし花鳥説いつく
弁 白文は事せぬる
箋 白文の事ある故よの行なるめて
中文せりせての行を小筆相の
ゆるてたぬらし
秘 立よりてかゝるとみえしかつあそに
葉の筆相のりとよ立より行へ
かくし 箋

めつらにありしと
箋 葉乃たるより 秘
文は立る也行しも
中文は葉より同のひしる
やせ 弁 箋
まとの行の世をるまりしき
葉のた中文の末ゆそかつくり
行はさるうしとうしむたかり
これもみつしめよりあるらし さ海

乃事
又墓所をひろとふし我もあはれ
まうてさてありしは中宮職と
とりしをせし
うけれ人乃中よ
現在の人の事なれ思ひくし
ましてうすき縁乃事はさすか
く人もとりあはれなくし
とし弁

其乃人をもさうんなくしまて
小宰相よもこれならんと分明に
いこねし
あやしとせしめし人の事よ細ても
行りけるか
墓所を通し淨母と法し
つけねし
その人は我あるんやと
墓乃なよ名をしくはせよ法し

又猪頭の山より出し日
峯梢の羽浮舞出来るより
哥もうつれ
弁 今めかしき哥も言浮れ事のあるかや
箋 浮舞のうせみし時分に下お南
せめし葉れなおそきて
秘 有りうちて色つるおかりうんも
葉の性殊勝し
弁 上臈しきたりし

哥衣も中つけのよもんなる
秘 白衣也 箋
そひへよもんたも
浮舞れ其叓とる白いき庙け
紅りんとし
さみの紅そうすしてこそしそさ縁れわりや
秘 白衣明石中衣へ葉よわうし
箋 紅へとすきれしとし
白のに紅よして中衣の紅よ

さゆうしかるへし
家もかうつひのやかてハ
秘
白家のかうつひ頭をしるさるゝハ
我ハ一向によそうしうれよそてかへし
とし
昇
薫花のかゝり白家の粧家か花
君ハりうつてひ給てしるしく
さふとゆうきへとさひかりして
しゝ世きかんとし

うつしかりありて来乃世ありは
こきらうゝのさらう
河
黄泉　冥途なし
花
うつしくハよのつゐれへとは黄泉ハ
日本紀に伊弉冊尊のまつくうり
入給うを湯御れとうひ給ふ
そんしてやうこれを薫浮舟君の
秘
事にさうひよせ侍り
我黄実れへによりてとし　後世の

縁とこのミてありかたんとあすわ
おと一向よ思ひ入し弁
義 今生よそれのかりくる人すれはて
来生をとちまきしんいまことなるを
秘 きこゆかりつくは真実しこそれまつ
うせたる人とむすふ為しとし
我の後かれわかれと
義 中宮へ又啓しあかりける此事
みつのまちよわ乃後わけるもとむひ
かりつよきさ次に僧都のうけすゝめ
あさましくそうしまひ給りけるを
僧都の中宮へ浮舟の事を又申
出るへし
仏とおもひつゝしくしくおもてもるなき
秘 浮舟の性をとへ給し 義
むひかりけるつゐさ本のおかりもし
き性をとひて
人のおもひ給ひしゆめそて

花
浮舟君のとりとうきんとおりひ
侍りしとかりと見て侍りしく
のりふやうよあはけとうれくる
事ハさりや侍りつるんかて暮れ
さひすくて
宮の流ともいとゝろしけよ
花
白家れ流事し并葉
かの事又さうんとこくつけ給りく
葉
白れ付事をとゆうけ給ろ給へ
うはやうよおかさんりとよちくれ
うれとてゐさんすくく白乃事と
ほのめかしゝるし
侍給のかくつかしよ
中宮の流約
あおうしろし葉の
葉
葉の事りてあおそうしうてく
もさうさりしとの給し
さとえんうとまうけるれんの

秘 白家れすまゝくしてき事し 并
いとうくうきねうのと
義 好家ゆへうろくしきなれと白乃
とり所へなかれ心りゑれい行とてち
せりさんそとし
心うくうんとの所うれ
秘 流あや心うり
并 中家の白家れ流事とゑのし見
所流あやかし

いとゝりくされ心うれた
花 た家の流心のともくしき記甚れ
心よちみ事し覚よりあれ家甚
心との人行きし
秘 中家れ流すしいうくうきおり
まうさしうかし
秘 中家の流女性と甚れちゝを
もとむしん山さといろこみうあれし
義 甚の心し蔓浮橋れ席し

月ごとの八日にはかならずまいりしるしをあらはさ
毎月八日ハ六斎日也始しをらん
薬師の縁日なれバなるべし
中堂(チウダウ)にハ時〱(トキ〲)参り給ひけり
(付)根本中堂
延暦十七年傳教大師建立之
本尊薬師如来者大師造立之
其以後梵天帝釈四天王忠仁公
日光月光菩薩ハ法関白十二
神将御堂関白殿造副之(義)
(昇)つゐに山へのぼり給事ありしに
そのほとりにてよりとおりしけるなり
さうしてはことさらにおもし
ますます信じ給ふべし
横川によりおハせんと
僧都の坊へなり
かのせしとのこゝろハする
(秘)常陸房なるべし

箋 浮舟の同腹の弟なるをいふなり
これ〳〵まいらせよとせし
箋 浮舟乃母のこと
秘 母めのとなとし
ありさまなとしらさらん
箋 横様なりけんとし
うらみん事かなしふもあはれとも
くはへんとにやあらん
秘 先うらみんもあはれなとをふか
ゐさき多かりける此こゝろと思し
て終のくちなんとおもはれし
算 浮舟の事をさ海しせひ給なし
先隠密なへしともせひ終又此
人の不思議の事ともいと悲しきの
あひてうらみん時あはれをとく
ましの契にやなと業しおはせ
又中をと思しおへ給にや
箋 尋の字を書かへり心あるへしとそ

私秘ノ義然へきん

はしらにその人のよれ見つけたるを

秘 自然おもしける人に異して

ありてのとし

かきつとする人乃中にそ

義 尼君てらと云

うき事しときつけたらん

義 秘ノ義に同し

みちすうおもりしきれけるとや

義 菩乃人弟にその中堂此道を

うつや